



どの教室の窓からも「海」が見えた
どの教室の窓からも「空」が見える

Bulletin of Nagasaki Prefectural NISHISONOGI Senior High School
A school as a Learning Community since 2016



西 濤

「学び」から「希望」へ



【学びの共同体】研究紀要 創刊号

長崎県立西彼杵高等学校

生徒の学びの質を高めていかなければならない。その生徒の「学びの質」と「平等」を同時に追求する創造的で探究的な「学び」の実現こそが、わたしたちが目指すべき途である。すなわち「対話による主体的で共同的な深い学び」をこそ探究しようとしている。そのために、本校では【学びの共同体】とよばれるアクティブ・ラーニングの一種である「共同学習」の方法を「授業改革」から「学校改革」への基軸として採用した。【学びの共同体】の学校は、生徒たちが学び合う学校であり、教師たちもまた教育の専門家として共に学び合う学校である。

佐藤学氏は、教師が教育の専門家として成長するうえで、次の三つの規範を求めている。「第一は、子ども一人ひとりの尊厳を大切にすること。第二は、教材の可能性と発展性を大切にすること。そして第三は教師としての自らの哲学を大切にすること」(『教師花伝書』小学館)である。そのために、わたしたちの実践には、生徒の声(つぶやきだけではない声にならない沈黙の声まで)を聴き取り、テキストの中に隠された声を聴き取り、そして教師自身の内なる声を聴き取る力が必要なのである。わたしたち教師は、自らの「聴く力」をこそ学び、育てていかなければならない。

私は、教師のあり方を問う時いつも想起するのが、イギリスの哲学者ウィリアム・アーサー・ワードのことばである。

「凡庸な教師はよく喋る。良い教師は説明する。優れた教師はやってみせる。偉大な教師は生徒の心に火を点ける。」

生徒の心の中に、「未来を生きる希望の灯」を点けること。それこそが彼らの「生きる力」となるのであり、わたしたちの専門家としての使命を果たすことになるのではないか。「希望の灯」が点った生徒は、必ずや水平線を越え、青い海から蒼い空へと飛翔して行くであろう。

この度、わたしたちの実践の記録「研究紀要『西濤』」が創刊されたことは極めて意義深い。わたしたちは、この『西濤』を通じて、自分の実践の「声」を聴き取り、他者の実践からの「声」を聴き取ることができる。それが何より、生徒の「声なき声」を聴き取る力となる。一つひとつの実践が、相互に絡み合っただけがわたしたちの同僚性の証としての「交響曲」となるとき、西彼杵高校の「学び」から「希望」への願いは、実現するはずである。

学校から見える角力灘のパノラマの右端に、小さな天下島が見える。そこに小さな白い天下島灯台がある。小さな島によくぞ恐れおおい名前をつけたものだと思うが、しかし夜になるとその小さな灯台の光がどこまでも輝いて、確かな航路を照らすのである。岩場の多いこの海で、この小さな白い灯台は、多くの船の座礁を救い、確かな航路を指し示しているのである。小さくとも、「天下」の名にふさわしい存在感がある。

本「紀要『西濤』」も、いわば私たちのあるべき確かな実践航路を照らす「灯台」のようなものかも知れない。日々の自らの授業実践を振り返り、あるべき航路を探究する拠り所となるのである。その実現のときに、この西彼杵高校が、長崎の海で、小さくとも確かな光を照らす「灯台」のような存在となるに違いない。

1. 西彼杵高等学校における【学びの共同体】の意義



西彼杵高等学校【学びの共同体】プロジェクトチーム

チーフ 西村卓也(教諭・国語)

西彼杵高等学校では、福田鉄雄校長先生が着任した平成26年度より「アクティブラーニング」の一形態である【学びの共同体】についての検討・試行が始まり、平成27年度より全校で【学びの共同体】による「協同的学び」を基盤とした授業が本格的に開始された。

本校は西彼杵半島の西岸に位置する、全校生徒166名(1年生61名・2年生56名・3年生49名)の小規模校である。入学してくる生徒たちの多様化は、深刻で、片や国公立大学に本試験で合格していく生徒から、一方では中学校段階までの基本的知識が身につけていない生徒まで、幅広く在籍している。また、生育環境や学習歴も実に多岐にわたっており、種々の問題を抱える生徒も少なくない。そのような現状の中で、「学びから逃走する生徒たち」(佐藤学)をいかに「学び」に戻し、生涯にわたって自分の人生を豊かにしていくために「学び続ける」姿勢を持った人材に成長させるかが、本校に課された課題であった。また、生徒の学びの実態を見取り、確かな「学び」をデザインしていく、私たち教師の専門家としての同僚性の構築も必須である。

【学びの共同体】においては、「学びの共同体」の学校は、子どもたちが学び育ち合う学校であり、教師たちも教育の専門家として学び育ち合う学校であり、さらに保護者や市民も学校の改革に協力し参加して学び育ち合う学校である」(佐藤学『学校を改革する 学びの共同体の構想と実践』岩波ブックレット)というビジョンのもと、「公共性」と「民主主義」と「卓越性」の原理に基づきながら「対話的なコミュニケーションを通じた協同的学

び」を展開していく。「公共性」とは、多様な人々の集合体である社会の縮図としての学校の中で多様性を受容しながら協同する態度を指し、「民主主義」とは生徒一人ひとりの学ぶ権利と尊厳が尊重され多様な思想や個性が尊ばれることであり、「卓越性」とは「どんな困難な条件にあろうとも自他のベストを尽くし最高のものを追求すること」と佐藤氏は言う。

前述の通り、本校に入学してくる生徒の中には、自己に対する諦め感(どうせ自分は…、どうせ努力したって…)を抱いていたり、自分が置かれている現実の状況から逃避するような思考や行動を取ったりする傾向もある。そのような状況の中で、本校の全ての生徒の「自己肯定感を高め」、「高校生段階で求められる学力を保障」し、「自己実現を果たす力を付」け、「生涯にわたって成長していく姿勢を保障」するためには、これまでの一斉授業では限界があった。

【学びの共同体】の授業の進行について、佐藤氏は著書の中で以下のように述べている。

「学びの共同体の学校の協同的学びにおいては、誰もが理解すべき〈共有の課題〉(教科書レベル)と、その理解を基礎として挑戦する〈ジャンプの課題〉(教科書レベル以上)の二つの課題で授業をデザインしている。興味深いことに教室をつぶさに観察してみると、〈共有の課題〉でもっとも利益を得ているのは高学力の子どもたちであり、逆に〈ジャンプの課題〉でもっとも利益を得ているのは低学力の子どもたちである*1)

「わからない子どもの『ねえ、ここどうするの?』という問いから出発する対話において、つぶさに観察すると、その恩恵が、わからない子ども以上に、応答している子どもにももたらされていることに気づく。わかっている子どもは、分からない子どもへの応答によって、『わかり直し』を経験しているのである。(わかる)にも、いくつかのレベルがある。わかっているレベル、わかっていることを説明できるレベル、わかっていることを教えることができるレベル、さらにその上に、わかっていることでわかっていない子の問いに対応し、援助できるレベルがある。わからない子どもの問いに対応することによって、わかっている子どもの側がいつそう恩恵を受けることは多い。*2]

このように【学びの共同体】では、低学力の生徒はもちろん、高学力の生徒にも恩恵が得られると佐藤氏は言う。低学力の生徒は「支えられる」ことで学力を伸ばし、高学力の生徒は「支える」ことで既習内容への理解を更に確かなものにしていく。そして両者は「他者と協同する」中で、自分の話(悩み)に対応してくれる他者の存在と、他者の力になっている自己を認識し、「私を受け入れてくれている」「私も相手のためになっている」と感じ、「自分はこれでいいのだ」という「自己肯定感」を高めていくのである。

実際に自分が担任した生徒たちにも、自己肯定感が欠如していたり、世の中に対する「諦め感」を抱く生徒たちがいた。彼らの多くは中学校段階までに学力面や境遇により自分自身を大切にすることができなかつたり、何かに一生懸命取り組むことに困難を感じていた。

他校を退学して本校に入学してきたある男子生徒は、家庭での保護者との関係が上手く構築できず大人への強い不信感を抱いており、自分の感情を素直に表現したり、悩みを他者に打ち明けたりすることが苦手であった。入学当初は授業中も机

に突っ伏していることが多かったが、彼は【学びの共同体】を通して、級友たちから支えられ、他者と協同する中で成長していった。そして、最後は級友と両親に感謝を述べて卒業していったのである。彼が卒業式の最後のHRで述べた、「皆と一緒に居てくれたから、支えてくれたから、この学校で高校を卒業することができました。俺の人生は変わりました。」という言葉は、【学びの共同体】が持つ可能性を、はっきりと示してくれていると私は思っている。

この他にも多くの生徒が【学びの共同体】に取り組むことで自信を持って卒業していった。【学びの共同体】は理想ではなく、確かに生徒に「生きる力」を育み、「明日を生きる希望」を与えてくれるものであり、実践する意義は極めて大きいと私は考えている。

*1 *2

『学校を改革する 学びの共同体の構想と実践』(佐藤学・岩波ブックレット 2015年5月)

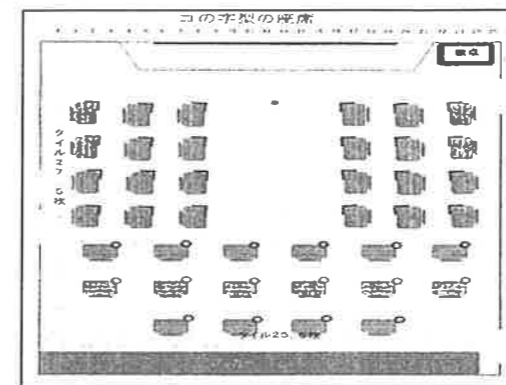
2. 【学びの共同体】の実践

西彼杵高等学校【学びの共同体】プロジェクトチーム
チーフ 西村卓也(教諭・国語)

1. 【学びの共同体】の授業の基本構造

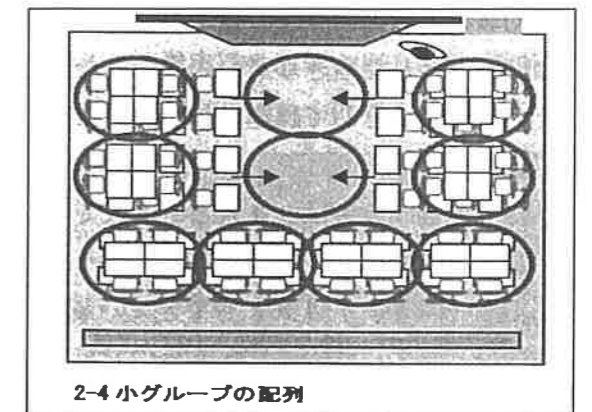
(1) 教室内の配置

高等学校における【学びの共同体】では、男女混合4人グループによる協同的学びを中心に授業が構成される。クラスの数によっては1グループを3人で構成する場合もある(5人以上のグループは望ましくない)。佐藤学氏(東京大学名誉教授、【学びの共同体】提唱者)によれば、「4人を超えると、誰かが学びから阻害されてしまう*1」おそれがあるという。確かにこれまでの自分が必要に応じて行ってきた、いわゆる「グループ学習」を振り返ると、5人以上になると「何もしない」「人任せ」の生徒が発生してきていた。このことは、効果的な「協同的な学び」の場を設定する際の重要な視点である。



授業の最初や個人で解決できそうな課題(いわゆる“共有の課題”)に取り組んだり、自分で探究を行うなどの時には、上図のような「コの字型」の机配置である。この配置のメリットは、その教室集団のメンバーの、課題に対する表情や仕草が分かることで、学習に対する不安感が軽減される所にある。また、他者の頑張る姿から自分自身の取り組みの在り方を見直し、自身の学ぶ姿勢の改

善に向かうという側面もある。デメリットとしては、生徒アンケートや日常の会話から挙がるのが「黒板が見えにくい」というのがある。しかし、これは高等学校でのこれまでのスタンダードであった「Board and Talk」型授業に慣れてきたためであり、今後の更なる実践の文脈の中で解消されていくのではないだろうか。



個人で解決できない課題(いわゆる『ジャンプの課題』)に取り組むときには、上図のようなイメージで前述のような男女混合4人のグループを形成する。このグループ形成には恣意的な要素が含まれてはならない。なぜなら、どのような他者とも協同することが大切だからである(いじめや人間関係のトラブルなど、生命に関わる事情は別である)。各グループでは役割を決めることなく、それぞれが他者と協同しながら探究していく。そこには「司会」や「記録」などの「グループの合意形成」を目的とした人間関係もなく、ましてや学力の高低や日頃の人間関係に由来するヒエラルキーは存在しない。また教師はそのような平等性が確保されるような、課題のレベル設定や探究活動中の援助(つなぐ・もどす)を適切に行う必要が

ある。

(2) 課題の設定の考え方

「授業中にどのような課題を設定するか」は、【学びの共同体】や他のアクティブラーニングに留まらず、生徒が学んだ結果の質の保障の面において、非常に重要な問題である。この問題について、本校の実践を当初から指導・助言下さっている永島孝嗣氏は、以下のように述べられている。

「…究極的に言えば、課題のつくり方は、課題に取り組む生徒の姿から学ぶしかない。どのようなとき、学び続けられて、どのようなとき、諦めてしまうのか、取り組もうとすらないのか。50分の中のタイミング・一人ひとりの個性・クラスの雰囲気・人間関係・補助教材・教師の課題の提示の仕方・ケア…など挙げだしたらきりが無い複合的なもの、その中の1つとして課題自体があるに過ぎない。*2」

「探究の協同学習は、4人とも1人では取り組むことのできない課題に対して行うものである。(…中略…)4人ともできないという意味ではじめて、4人にはある種の対等さが担保される。*3」

生徒が主体的に学び、探究していくことで力を付けるような課題の設定には、①生徒から学ぶ、②プロセスの中で力を付けるような課題内容の検討、③「何を学ばせるか」というビジョン、の3点が常に教師には突き詰めていくことが求められていると考えられる。これは単に過去の入試問題等をどこから引っ張ってくるだけでは解決しない、教師にとって難しい“課題”である。

(3) 教師の役割

【学びの共同体】における教師の役割は、以下のようにまとめられている。

- ①「質の高い学び」を保證する課題を提示。
- ②生徒の「学び」の状況を細やかに観察する(見取りを行う)。
- ③見取りの結果を基に、「学び」が深まっている

くように支援(つなぐ・もどす)を行う。

④探究的学びが停滞した(グループでの協同が停滞した)時に、コの字型に戻すなどの、全体的なファシリテート。 (*4)

これまでの「一斉授業」での教師の立ち位置とは異なり、あくまでも「生徒(たち)自身」の学びが展開されるようにコーディネートしていくことが求められる。そこには従前の一斉授業の時のような「大きな声」や「身振り手振り」の必要性は少なく、教師は「しつとりと」話し、「言葉を精選」して、「指示や発言は少なく端的」に行う。教師の高いテンションは、逆に生徒の学びを阻害することがこれまでの研究や実践でも報告され、上記のような教師の立ち位置が、【学びの共同体】のスタンダードであると考えられているようだ。ちなみに、生徒についても同様で、高いテンションや活発にしている時には、学びは深まっていないという。「沈黙考しながら」「他者と静かに呟き合いながら」に進んでいく探究が、価値ある探究活動と言われる。確かに、人間は活発に活動している時は、じっくりと思考できないということには納得できる。

このように、【学びの共同体】の授業は、これまで私たちが行ってきた一斉授業とはその形態も方法も大きく異なる。

私はまだ多くはないこの実践の中で、これらの指摘が生徒の学力を伸ばす重要な示唆を与えてくれていることに、気づきはじめています。

3. 校内での授業実践の成果

本校では基本的に全ての教科・科目で【学びの共同体】による授業を実施している。ただし、全ての授業が必ずしも毎回「共有の課題」と「ジャンプの課題」がある授業ではなく、教科・科目の特性や学習内容により、「共有の課題」のみの時もある。また、「ジャンプの課題」のみの場合もあり、授業者の裁量に委ねられている。しかし、コの字型の机の配置や他者との協同による学びの機会、そ

して「個」が伸びるための時間の確保など、【学びの共同体】の基本といえる部分は、確実に各授業で実施するようにコンセンサスの統一が図られている。この「型」を守るだけで、生徒の学習状況は想像以上によくなっている。

また、通常授業に留まらず、校内での様々な機会でも「他者との協同」を用いた活動が、自然と行われるようになってきている。例えば本校の特色の一つである「学び直し」の時間としての「萌タイム*5」においては、生徒から自然と「他者との協同による学び」を求める声が出たため、個人学習ではなくグループや仲間と協同する形式での取り組みを実施している。

また、生徒の姿にも変化が見られてきた。【学びの共同体】の授業を実践し続ける中で、明らかに生徒が「落ち着いて」きたのである。【学びの共同体】では教師は「しつとりと、静かに話」し、生徒も課題に対して他者と協同しながら「静かに思考」し、「“個”の力を伸ばして」いく。そのような授業空間で育った生徒たちは、みだりに騒ぐことが少なくなり、物事を落ち着いて考えることができるようになりつつある。

本紀要において、年に2回行われる【学びの共同体】に関する生徒アンケート及びアセス検査(学校適応度調査)の結果を別ページに掲載しているので、是非ご参照いただきたい。

4. 校内研修

(1) 「研究授業」を基にした「授業研究」

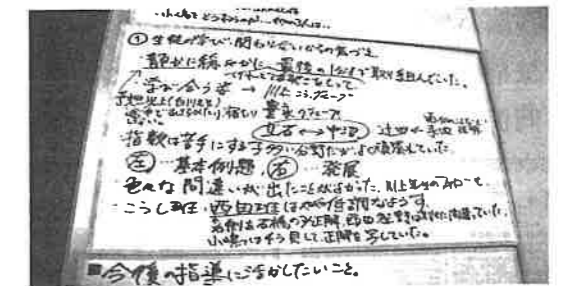
「研究授業」というと初任者研修や経年研修の該当者が主に担当するものと思われがちであるが、本校では全ての教師が必ず年に1回、「研究授業」を行い、教科や学年を越えて全ての教師参加の形で「授業研究」を行っている。小規模校だからこそ可能であるという側面もあるが、本校ではこの「研究授業」を中心として、行事の精選や日程の調整を行っている。

また、「研究授業」に於ける参観者の視点や授業後に実施される「授業研究」も、従来の研究授業とは異なっている。本校では授業を参観する際には教師の教授法や教材の可否ではなく(教科面での反省や検討については、後に各教科会レベルで実施)、「生徒がいかに行っているか」に注目する。具体的には、

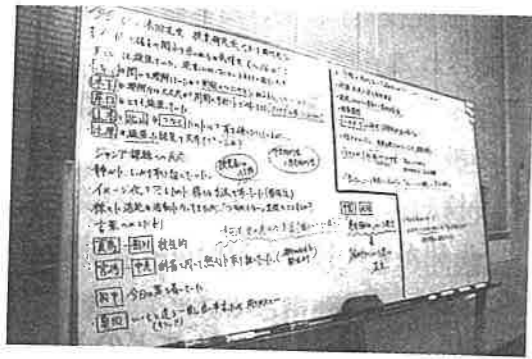
- 生徒が提示された課題に対してどのような姿勢でいるか。
 - 意欲や関心をもって取り組もうとしているか。
 - どのような協同的な学びを行っているか。(どのような関係性を通して学んでいるか)
 - 各生徒の学びは深まっていたか。 など
- というフィルターを通して「授業」を参観する。そして、教師は自らが見取ったものから、新たな自分自身の授業実践や改善を振り返り、教師も「専門家として成長」していくのである。



△全ての教師が、柔らかい雰囲気のもとで授業研究を行う。



△各グループでメンバーそれぞれの気づきを共有する。



△生徒の名前が多く出る授業研究。多角的に学びを検証。

「授業研究」の進め方については、学校が「教師も学び合う」場である以上、単に協議グループの合意形成で終わってしまうのではなく、あくまでも教師一人ひとりの成長に資する内容でなければならないと考える。まだまだ具体的な進め方については検討の余地が必要であるが、これまで、非常に有意義な「授業研究」が展開されている。

(2) 『まなびあい』の発行

本校での【学びの共同体】の推進や実践の深化、及び教師の意識の高揚を図るべく、約2週間に1回の割合で、『まなびあい』と称してプロジェクトチームから「研修だより」のようなものを発行している。学校行事や業務の都合上、発行のペースが乱れることもあったが、概ね遂行できている。現在は担当者（プロジェクトのチーフ）のみが記事を書いているが、次年度からは他の先生方にも広く寄稿いただき、様々な視点からの実践の報告や検証を行い、【学びの共同体】の理念の一つである、「同僚性の構築」に、より資する内容としたい。



なお、今年度発行した「まなびあい」については、本紀要別ページに掲載しているので、参照していただきたい。

5. 公開授業研究会

本校では、外部講師の先生方を年に3回お招きし、そのうち2回を「公開授業研究会」として、近隣はもとより県下に広報して、校外の先生方と共に「学び合う」機会としている。

「公開授業研究会」を行う目的は、日常の本校の授業実践を公開し、外部からの感想や批評をいただくことによって、校内での実践を検証し、取り組みをより「深化」させようとするところにある。本校では以下のような内容で実施している。

- ①公開授業（全学年自由参観）
- ②中心授業（体育館に教室を再現して実施、全員参観）
- ③授業研究（本校職員の授業研究の様子を参観）
- ④講演（外部講師による）

学校というのは、ともすれば閉鎖的な環境になりがちであり、そのような状況では自分たちの実践の妥当性や効果を客観的に検証できない。本校では、「学校の全体は『学びの場』である（"School as Learning Community"）」という理念のもと、現状に満足することなく、全ての教師が学び続けている。そのためには、外部からの忌憚ないご意見やご指摘が大きな力となる。下表は、これまで行われた「公開授業研究会」の外部参加者数である。

第1回(H27.7.9 草川剛人先生)…外部参加	59名
第2回(H27.12.9 松尾宏之 本校教頭)…外部参加	24名
第3回(H28.2.8 永島孝嗣 先生)…外部参加	99名
第4回(H28.6.17 佐藤学 先生)…外部参加	127名
第5回(H28.12.20 姜尚中 先生)…外部参加	165名

※第5回は「第6回長崎県NIEフェア」との共催



△体育館に教室を再現し、周囲に参観席を設ける。



△授業研究の様子を参観する参加者の方々。



△自由に参観しやすい環境にも配慮しています。



△第4回「佐藤学先生」による熱い講演が展開される。



△第5回「姜尚中先生」には「学びの意義」を教えてくださいました。

6. 今後の課題

(1) 継続すること

何よりも「継続すること」が大切であると考えられる。

従前の教育方法とは異なる部分が多く、自身のこれまでの教育の考え方や概念の根本的な変化が求められるため、何か少しでも不安要素や問題が生じた場合、ともすれば一斉授業型に戻ろうとする傾向が生まれがちである。しかし、その問題に直面した時こそ、【学びの共同体】の実践に真摯に取り組み、改善すべき部分や進化すべき部分に対して全教職員が一丸となって取り組んでいくことで、確実に西彼杵高校に集う生徒たちの「生きる力」の伸張を求めることができると考えている。

(2) 課題の在り方の検討

「ジャンプの課題」の在り方が、この【学びの共同体】の実践開始当初からの大きな問題であった。どのような「ジャンプの課題」を設定すればよいのかについては、種々の書籍の中で様々な専門家の方々が述べておられるが、共通して言えるのは「高い教科専門性」こそが教師には求められているということである。この「教科専門性」は、「～大学の問題を解くレベル」というような部分的な要素ではなく、各教科科目の「本質」や「真髄」を十分に理解することであると考えられる。そしてこれまでの授業研究を通して、教科科目の「本質」や「真髄」については自教科のみでなく、他の教科の、他の学年の授業からインスピレーションやヒントを得ることも少なくないような気が

する。今後も「同僚性」を基に、学年や教科を越えて、課題の在り方と「教科の本質・真髄」を教科の壁を超えて、先生方と共に考えていきたい。

(3) 生徒への「学びの作法」の徹底

生徒アンケートの結果の中で、級友の学習意欲やグループでの探究的学びにおけるとまどいについての記述が多く見られた。例えば「私語が多い」「最初から答えを写そうとする」「なぜ一斉授業じゃダメなのか」といった回答である。今後は年度当初に生徒を対象に、【学びの共同体】の意義を説明するオリエンテーションを着実に、数回実施し、教師と生徒もコンセンサスを統一して、「学び」に向かう環境作りに取り組む必要があると考えている。

(4) 小中学校の先生方との研修交流

「公開授業研究会」や教育センターでのアクティブラーニングに係る説明会や研究成果発表会などで、よく小中学校の先生方から「高校は遅れている」「高校の先生は生徒を学ばせるのが下手だ」「もっと高校の先生は小中学校から学ぶべきだ」といった、手厳しい意見を頂戴する。確かに、グループ学習の経験値は、小中学校の方が高い。その参考にすべき点は積極的に取り入れるとともに、小中学校が「グループ」学習に力点を置いているのに対し、私たちの共同学習は“個”の力の伸張にある点や、形態は類似していても内容・ねらいの違いを明確にしていく必要があると考える。

今後も交流を図りながら、研修を深めていく必要がある。

おわりに

私は6月17日に実施された「第4回公開授業研究会」に於いて「中心授業」を担当させてもらったが、同僚からの指導や助言の中で、「国語」そして「ことば」に対する自分の勉強不足や指導力不足、そして教師力不足に改めて直面せざるを得なかった。教師として、これまで「教えてきた」と考えてきた傲慢な自分に直面し、一人の教師と

しての存在そのものを問い直された思いがしたことを覚えている。

本当に価値ある【学びの共同体】の実現のためには、教師の側の相当の覚悟と努力、そして研究が必要であることを痛感した。課題の内容やレベル、そして生徒がどのような反応を示すか、生徒はどのプロセスでどのような力を付けていくのか等々、そこには教師としての「専門職」の厳しさ、本来の「授業で勝負する」教師という存在の基本理念がある。

縁あって平成27年度から西彼杵高校に赴任し、【学びの共同体】に携わらせていただいているが、大変なことや苦しいことも多い中で、生徒の「学び」を大切に教育に取り組んでいることの自負が、芽生えはじめてきている気もする。今後も研鑽を積んでいきたい。

*1 *2 *3

『学校を改革する 学びの共同体の構想と実践』
(佐藤学・岩波ブックレット 2015年5月)

*4 『「学びの共同体」の実践 学びが開く！高校の授業』(佐藤学ほか・明治図書 2015年8月)

*5 「萌タイム」

…「萌タイム」とは、就職希望者には「学び直し」を、進学希望者には進学のための補習授業を、表裏で同時開講するものである。

3. 平成28年度実施の「研究授業」及び「授業研究」について

(1) 授業研究の概要

本校では全教師が年に1回は必ず「研究授業」を実施し、全ての教師が「授業研究会」に参加して【学びの共同体】に関する研修に取り組んでいる。「研究会」では、参加者が見取った生徒の「学び」の状況（どこで学びが生まれ、どこで学びが停滞したのか、誰が誰をケアしているか等）を共有することで、自身の授業実践を省み、次の授業に向けてのアイデアや勇気をもらう会となることを心がけて進められている。

- ① 授業者から授業についての説明（ねらいや成果など）
- ② グループ協議（生徒の「学び」の状況について具体的な生徒名を挙げながら）
- ③ 個人発表（参加者全員が授業を参観しての自分自身の「新しい気づき」について簡潔に述べる）
- ④ 授業者からの感想

現在は概ね上記の流れで進行している。生徒と同様に教師も他者との協同の中で「個の力」を高めるためには、どのような方法が効果的なのかを、現在も検討中である。

(2) 校内体制の整備

年間行事予定作成の段階で教務と検討し、教師の数と公開授業研究会（年2回）を基にしながら研究授業を行う日を決定し、担当の割当てを行う。

「研究授業」及び「授業研究会」の実施に当たっては、6時間目までは通常授業を行い、「7時間目」に「研究授業」対象クラスのみ授業を実施する（当該クラス以外は放課）。そして放課後に「授業研究会」を行っている。このような時間設定を行うことで、全教師が集まることができるのである。

(3) 授業デザインと振り返り

【学びの共同体】の「研究授業」では従来の「学習指導案」ではなく、授業のねらいや流れを簡潔に記した「授業デザイン」を用いている。また、「研究授業」の後で授業者は「振り返りシート」を作成し、自身の授業の反省や「研究会」で学んだことを記録し、自身の授業改善に活用している。

(4) 平成28年度「研究授業」担当一覧

5月12日（木）林田 賢吾【数学】	11月17日（木）松尾 雅彦【数学】
6月 9日（木）畠山 一馬【英語】	12月20日（火）白山 修 【現社】
6月17日（金）西村 卓也【国語】	1月20日（火）白山 修 【日史】
7月 7日（木）田中 純子【生物】	
8月26日（金）田川 一弥【保体】	
9月15日（木）的野 博之【情報】	
9月20日（火）真鳥 裕子【音楽】	
10月 6日（木）前川 卓郎【英語】	
10月13日（木）川上 和希【数学】	
10月20日（木）木田 博子【国語】	
10月27日（木）本多 信吾【化学】	

授業デザイン

平成28年 5月12日(木) 7校時
 授業者 林 田 賢 吾

1	授業科目	数学Ⅱ
2	授業クラス	3年1組(男子10名、女子7名 計17名)
3	授業教室	3年1組教室
4	授業内容	4章 三角関数 2節 三角関数の加法定理 ※使用教科書…高等学校新編数学Ⅱ 補助教材 …授業プリント
5	授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・「三角関数の加法定理」を公式として活用できる。 ・公式とそれ以前の既習事項をつなぎ、視点を変えて考えられることに気づき、解法を愉しむ。
6	本日のジャンプ項目	$\cos 15^\circ$ を 鋭角の三角比(数学Ⅰの内容)で求める。
7	授業の進行	<p>(1) $\cos 15^\circ$ の値を求める。 【コの字→ペア→一斉】 三角関数の加法定理(共通項目)を利用</p> <p>(2) 直角三角形を利用して、$\cos 15^\circ$ を考える。(授業プリント1)) ヒントなし(ジャンプ項目) 【コの字→班】</p> <p>(3) ヒントを与えて(2)の解決策を考える。 【班】 補助線、三平方の定理、二重根号など</p> <p>(4) 授業プリント2を考える。(時間がなければカット) 【班】</p>

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年 5月12日(木)	対象	3年1組 男子10名 女子7名 計17名
教科	数学Ⅱ	授業者	林田賢吾
ジャンプ課題	$\cos 15^\circ$ の値を加法定理の公式を使わず、図を用いて導き出す。		
成果	<p>中間考査直前の時期で、内容設定に迷ったが1時間完結で「加法定理の機械的な公式適用」と「既習事項をつなぎ、公式を他方面から見ること」をテーマに授業を構成し実施した。</p> <p>生徒は、多くの参観者がいる普段と違った環境の中で、通常より緊張した授業態度で頑張ってくれた。課題に対して、個人としても班活動でも積極的に取り組み、まとめの全体説明でもよい反応を返してくれた。</p>		
課題	<p>授業の中で納得、理解したことを各個人の実力として定着させるには反復練習(問題演習)が欠かせないが、その部分を疎かにする生徒が多く、不十分な理解にとどまっている。家庭学習での課題への取り組みの改善の必要性を感じる。</p>		
展望	<p>「学びの共同体」スタイルの授業形態(ペア・コの字・班学習など)に生徒が馴染んで、違和感なく活動を中心にした授業が展開されつつある。今後、授業内容を工夫して、どのような「ジャンプ課題」を授業の中に入れていくかを研究していく必要がある。</p>		

授業デザイン

平成28年6月9日(木) 7校時
 授業者 畠山一馬

1	授業科目	コミュニケーション英語Ⅲ
2	授業クラス	3年1組
3	授業教室	3年1組教室
4	授業内容	○Lesson 2 The Beautiful Game (pp.34-35) ○使用教科書 New ONE WORLD Communication Ⅲ (教育出版)
5	授業のねらい	○サッカーの起源や世界での広がりについて書かれている内容を読んで、情報を整理する。 ○時代背景を理解しながらサッカーの歴史について理解する。 ○態や時制に留意して英文を読む。 ○形式主語(It is ~ to 不定詞)構文等の理解を深める。
6	本日のジャンプ項目	○大学入試レベルの問題演習への取組を通し、本課の新出語(句)、イディオム、構文等を理解を深め・活用できるようになる。
7	授業の進行	(1) 英単語小テスト【コの字】 (2) 新出語(句)、イディオム等の確認【コの字】→【ペア】 (3) 大学入試レベルの問題演習【コの字】→【グループ】 (4) 教科書本文(pp. 34-35)の内容理解 (フレーズリーディング→精読→問題演習)【コの字】 (5) 本文の内容理解について開き合い→解答→日本語訳確認【グループ】 (6) 本文の音読【コの字】 (6) 本時のまとめとふりかえり【コの字】

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年6月9日(木)	対象	3年1組 男子10名 女子7名 計17名
教科	コミュニケーション英語Ⅲ	授業者	畠山一馬
授業内容	Lesson 2 The Beautiful Game		
ジャンプ課題	実際の大学入試問題の演習に取り組む		
成果	今回の授業では、本課の新出語、イディオム、構文等を含む大学入試問題をジャンプ課題として、敢えて授業の初めに取り組みさせた。入試問題を完全に解くことが目的ではなく、それに取り組む過程で基礎的文法事項(今回は形式主語構文)の理解を深めることが目的であった。特に国公立大学二次試験レベルの英文読解にチャレンジすることで、形式主語構文を振り返り、その用法の理解を深めることができたと感じている。また、その後の共有の課題では、教科書本文の内容理解を目的とした。今回は内容理解に特化したため、ワークシートの設問は意図的に全て日本語での問いにした。サッカー一部所属の、英語にかなりの苦手意識を持つ生徒がいたが、サッカーについての題材であったため、協同する中で積極的に学ぶ姿勢が見られた。生徒の能力に関わらず、生徒の学びへのモチベーションを引き出す教材をどう設定するかが大切であると考えさせられた1時間であった。		
課題	○ジャンプ課題の設定 生徒も含めて、ジャンプ課題そのものを解けるかどうか目的になってしまうことが多々ある。今回もそうってしまった生徒がいた。ジャンプ課題への取組をとおして、その時間にどのような知識・技能を定着させたいのかを、時間をかけて熟考しなければならない。 ○共有の課題とジャンプ課題の提示タイミング、順番等の研究 今回はジャンプ課題を最初に提示したが、はたしてそれが本当に良かったのかはわからない。もっと授業の展開(生徒の学びの流れ)を考えて授業の構成を考える必要があった。 ○言語教科として、技能訓練(特に聴く・話す)の設定 読むこと・書くことに加えて音声面に関わる技能の運用訓練の場(もちろん音読も含めて)を設定できなかった。		
展望	○毎時間の教材に生徒をどう引きつけるか 単に生徒の身の周りの出来事等を扱うだけではいけない。あらゆることを教材につなげていくためのアンテナを自分自身が広げないといけない。いまだ教科書の中身を扱っているが、教科書を教えるのではなく、教科書を用いて生徒に何を学んでほしいかを考え抜くことが必要だと感じている。全ての教科をとおして(学校全体として)生徒にどの様な力を育みたいのかを考え、その下で、英語科としての学力観を毎日考え、授業につないでいくことが必要である。		

授業デザイン

平成28年6月17日(金) 5校時
授業者 西村 卓也

- 1 授業科目 現代文B
- 2 授業クラス 3年1組(探究コース 男子10名・女子7名)
- 3 授業教室 体育館アリーナ(※中心授業)
- 4 授業内容
評論『『つながり』と『ぬくもり』(鷲田清一) 第3段落の読解(2)
※使用教材:『ちくま評論入門』(筑摩書房)より抜粋したプリント
- 5 授業のねらい
①「もし〜できれば」の如何によって自己の存在証明が左右されてしまうことに鬱屈している子どもたちの現状を抑える。
②子どもたちが自己の存在証明のために「愛情」を求めていることを抑える。
③本文で取り上げられている問題について、当事者意識をもって考察する。
- 6 本日のジャンプ項目
○筆者の最終的な結論を推測することを通して、自己の存在証明を持ち辛い現代社会で自分がどうあるべきか、当事者意識を持って考える。
- 7 授業の進行
1) 第3段落の音読… [4分] 指名・◎
2) 段落構造の確認… [5分] ◎→ [5分] ◎
3) 共有課題 段落前半をまとめる問題… [7分] ◎→ [8分] ◎
4) ジャンプの課題 筆者の最終的な結論を推測する… [7分] ◎→ [8分] ◎
5) 参考資料(出典のコピー)の参照… [5分] ◎

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年6月17日(金)	対象	3年1組 男子10名 女子7名 計17名
教科	現代文B	授業者	西村 卓也
授業内容	評論『『つながり』と『ぬくもり』(鷲田清一) 第3段落の読解(2)		
ジャンプ課題	筆者の最終的な結論を推測することを通して、自己の存在証明も持ち辛い現代社会で自分がどうあるべきか、当事者意識を持って考える。		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の最初で他者との協同を入れることと教員側の発言を最小限に抑えることで、生徒が落ち着いて学びを深めることができる雰囲気作りができた。 ・最後まで生徒は頑張って学びを進めていくことができた。 ・評論文の読解と自信の日常との照合を行おうとする態度を育むことができた(授業後も文章の内容を自己に落とし込もうとする話を生徒間でしていた)。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンプの課題は、文章の読解にもっと夢中になるような課題設定をすべきであった。課題の解釈が中心となり、探究の手前である「本文の十分な読解」ができていなかった。 ・生徒の学びが本文に依拠する部分が少なく、出された課題の解釈とこれまでの自身の生活経験や思いを表出する学びになってしまった。「国語はテキストと個人との会話である」ということを、もう一度確認せねばならない。 ・教科書でなく、補助資料(本文の出典)に重きを置く読みになってしまった。 		
展望	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が「夢中になって本文を読み込む」ための課題設定。 ・「個」の読解力が上がるための授業内容や課題の検討(そのためには、何が「個」が身に付けるべき国語の力なのかについて、学び直さなければならない)。 ・教材研究の深化。今回は校長先生をはじめ多くの国語科の先生方にご負担をおかけしてしまった。 		

授業デザイン

平成28年7月7日(木) 7校時
授業者 田中純子

1 授業科目	科学と人間生活
2 授業クラス	3年2組、3年3組
3 授業教室	生物室
4 授業内容	さまざまな微生物 教材：教科書
5 授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 微生物が様々な場所(自分の体にも)に存在することを理解する。 ○ 微生物には、細菌、古細菌、原生生物、菌類、ウイルスがあることを理解する。 ○ 微生物にも、それぞれ大きさや分類上の違いがあることを理解する。 ○ 生物を分類する難しさを体験する。
6 本日のジャンプ項目	「微生物アンケート集計結果」にあげられた微生物を分類してみる。
7 授業の進行	<ul style="list-style-type: none"> ・ 微生物クイズ(1分) ・ 寒天培地で培養した自分のからだにいた微生物の観察(10分) 各自の培地を照明付ルーペで観察し、グループ内で見られた微生物(コロニー)の特徴をホワイトボードに書く。 ホワイトボードは、黒板に掲示する。 ・ 授業プリントの記入(24分) グループでプリントの空欄(1)～(30)の記入を行う。 ※(27)～(30)は、ホワイトボードで各グループの答えを黒板に掲示する。 ・ 微生物アンケート集計結果の確認と微生物の分類(10分) 前回の授業で記入したアンケートの集計結果を見て、そこにあげられた微生物を菌類や細菌類などに分類してみる。

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年7月7日(木)	対象	3年2、3組 男子24名 女子8名 計32名
教科	科学と人間生活	授業者	田中 純子
ジャンプ課題	「微生物アンケート集計結果」にあげられた微生物を分類してみる。		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人も寝ずに、自主的に学ぼうとしており、雑談ではなく、学習内容に関する会話を行っていた。 ・ アンケートを取って集計したり、人数分の寒天培地を作り、生徒に体を付けさせるなど、準備に労力はかかるが、実験、観察により身近なものを取り上げることで、効果的に学んでいた。 ・ グループになりホワイトボードにまとめる場面では、予想以上に積極的にホワイトボードを活用していた。 ・ ペアで行ったルーペを使った観察では、一人がルーペを支え、もう一人が観察し、互いに自分の考えをつぶやき、協同して学びが深まっていた。 ・ プリント記入時間が長く(20分)設定されていたが、予想以上に集中して取り組んでいた。 ・ 本来のジャンプ課題には時間的にたどり着けなかったが、授業プリント内の微生物の大きさ比べのクイズがジャンプ課題の役目を果たしていた。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1時間の中に予定していた学習内容が多すぎたため、ジャンプ課題にたどり着けなかった。 ・ 生徒の体から採集し培養した微生物について、いくつかのものを顕微鏡で観察し、顕微鏡の画像をプロジェクタ等で提示する活動も必要だったのではないかと思う。設営に手間取ることを理由にICTの利用を控えてしまうことが多いので、手軽に利用できるような工夫を考えていかなければならない。 		
展望	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後の社会や大学入試では、教科と教科、日常と授業などを関係付ける力が必要とされると考えられるが、理科と他教科の学習内容や現実社会とを結びつけるような課題を今後も取り入れていくべきである。 ・ 生徒が作業の流れを把握しやすいように、簡潔な手順で行えるように実験、観察の計画を立てなおす必要がある。 ・ 学習内容に関連する書籍や新聞記事の紹介を積極的に行うため、教師自身そのような情報を常に捜して学び続ける必要がある。 		

授業デザイン

平成28年 8月26日(金) 6校時
 授業者 田川 一 弥

1	授業科目	体育
2	授業クラス	全学年男子(1年35名・2年29名・3年34名 合計98名)
3	授業教室	体育館
4	授業内容	ダンス：表したいテーマにふさわしいイメージをとらえ、個や群でイメージを強調した作品にまとめ、表現すること
5	授業のねらい	手本となる映像から、自分たちとの違いを認識し、グループでイメージを共有し、見る人に伝わりやすいように表現すること
6	本日のジャンプ項目	イメージをグループで共有し、見る人に伝わるように表現を工夫すること
7	授業の進行	<ul style="list-style-type: none"> ・準備運動、補強運動(5分) ・日本体育大学「エッサッサ」の映像(10分) ※繰り返し映像を流す ・イメージの共有(5分) 違いを発見する、良いイメージを作る ・各ブロックでの練習(15分) ・発表(10分) ・次時の確認

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年8月26日(金)	対象	全学年男子 (1年35名・2年29名・3年34名 合計98名)
教科	体育	授業者	田川 一 弥
授業内容	ダンス：表したいテーマにふさわしいイメージをとらえ、個や群でイメージを強調した作品にまとめ、表現すること		
ジャンプ課題	イメージをグループで共有し、見る人に伝わるように表現を工夫すること		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで3年生を中心に3ブロックに分かれて練習を行ってきた。基本的な動きを身につけ、太鼓のリズムに動きをそろえることから、いかに迫力ある演技を行うか、勢いを見る人に感じてもらおうかという、表現の工夫を考え、実践していく段階である。 ・授業の導入で、日本体育大学の学生によるエッサッサの映像を見せ、自分たちとの違いを考えさせた。また、一度では気づかないことについても、練習時間中絶え間なく映像を流し続け、つまずいたときにいつでも映像を見返すことができるようにすることで、自ら映像を繰り返し見ようとする姿が見られた。(リーダーの3年生中心に) ・見る人にエッサッサの迫力や一体感を伝えるための表現の工夫として、声の大きさ、動きの動と静、リズムの変化(初めはゆっくり、徐々に速く)などに気づくことが出来た。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の終わりまでに、表現の工夫を動きの中で具体化すること。 ・太鼓と動きを合わせ、リーダーたちが持っているイメージを具体化するためには、全体でのイメージや動きの共有が必要となる。イメージのズレがないように、手本となる生徒を見つけたリ、コミュニケーションを具体的に行えるように支援する必要があると感じている。 		
展望	<ul style="list-style-type: none"> ・体育の授業はもともと「学びの共同体」のスタイルであると言われたことがある。しかし、何を学ばせるのか、何を身につけさせたいのか、授業における課題が曖昧になることがあるので、生徒たちが主体的に取り組むような課題の設定を工夫しなければならないと感じている。 ・課題の設定については、体育という教科の特徴として、生徒たちにとって「きつい」「いやだ」「きらい」というようなことがつきまとってしまう。運動を身に付けるためには必要なことと分かっているにもかかわらず、出来る喜び、やり遂げる充実感などが足りないと生徒たちの自発的な取り組みにつながらないので、その点に注意しながら、共有の課題とジャンプの課題を考え、授業を研究していく必要がある。 		

授業デザイン

平成28年 9月15日(木) 7校時
授業者 的野博之

1	授業科目	社会と情報
2	授業クラス	1年1組31名(男18 女13 休学1名)
3	授業教室	パソコン室
4	授業内容	○基礎から始める情報リテラシー p82～ 表計算ソフト ○教科書 高校社会と情報(実教出版)
5	授業のねらい	○COUNT、COUNTA、IF関数の使い方を学ぶ。 ○処理条件を自分で考えることで、関数について積極的に考える。
6	本日のジャンプ項目	○これまでに学んだ知識を使い問題をつくる。 ○他人が作成した問題が、処理条件に合っているか判断する。
7	授業の進行	(1) 例題22の説明。 (2) ジャンプの課題に取り組む。 (3) 周囲の人の問題が正しくできているか確認する。 (4) 「やってみよう」に挑戦する。

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年9月15日(木)	対象	1年1組 男子18名 女子13名 計31名
教科	社会と情報	授業者	的野博之
授業内容	表計算の使い方		
ジャンプ課題	これまでに学んだ知識を使い、表計算の問題をつくる。 他人が作成した問題が、処理条件に合っているか判断する。		
成果	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた問題を解くのではなく、自らが学んだ知識を活かす方法を考えさせた結果、普段の授業と大きく違う生徒の生き生きとした態度を見ることができた。 問題をつくる過程で基礎的な知識を再確認し、わからない部分を隣の生徒に尋ねたり、教師に質問したりと前向きな姿勢を引き出せた。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> 使って欲しい関数としてIF(判定)、COUNT(件数)、AVERAGE(平均)、端数処理(ROUND、ROUNDUP、ROUNDDOWN)などを想定していたが、割合の計算で絶対参照の部分がうまくできていなかった。 商品名を考えさせたが、思考停止になった生徒が多く、特に男子は想像力に乏しく、えんぴつ、消しゴムなど貧弱な回答になってしまった。 備考の部分は判定条件を自ら考えることで、IF文の構成を理解させようとしたが、飲み込めない生徒が多く、結局、こうしたらどうかと指示を出してしまった。生徒が考えつく前に回答を与えてしまったこと。 自分がつくった問題を他人に解かせるところまでは時間が足りなかった。 		
展望	<ul style="list-style-type: none"> 表計算の基礎知識を身につけるだけでなく、それをどのように活かしていけるか、学んだことから、新しく創造する喜びを感じさせる授業にしていきたい。 自分だけの知識ではなく、他人に認めてもらうことでさらなる学習意欲の向上を目指していけるよう指導していきたい。 		

授業デザイン

平成28年 9月20日(火) 7校時
授業者 真鳥 裕子

1	授業科目	音楽Ⅰ
2	授業クラス	1-2
3	授業教室	音楽室
4	授業内容	混声4部合唱 教材:「花は咲く」
5	授業のねらい	混声4部合唱の響きを作るための発声に気をつけながら、メロディーや歌詞の良さを表現にいかす工夫をする。また、その活動を通して音楽の良さを味わおうとする気持ちを育む。
6	本日のジャンプ項目	フレーズを考えて表現に生かす。
7	授業の進行	<ul style="list-style-type: none"> ・パート練習(10分) 気持ちをほぐし、音とりが不十分な所を練習する ・パート練習の成果を確認し、全体で通して歌う(10分) ・フレーズを発見させ、部分練習で表現をつくっていく(20分) ・本時の仕上げとして通して歌う(5分)

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年 9月20日(火)	対象	1年2組 男子17名 女13名 計30名
教科	音楽Ⅰ	授業者	真鳥 裕子
ジャンプ課題	フレーズを考えて表現に生かす		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実情に合わせて準備したパート練習用のCDが、効果的に活用されていた。 ・ハーモニーの調和や、美しい発声に明確な解答は無いが、それを求めて活動する中で育まれるものがある。「自分たちの声を聴こう」「息の使い方を考えてみよう」等の投げかけを通して、発声が柔らかく、自然と調和のとれたものへと近づいていった。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒どうしが学び合うための並び順を工夫できないか？ (今回は、混声3部のパート別で、前列・後列の生徒の表情が見えるように身長順とした) ・合唱がある程度形になった後、より高いクオリティーを持ったものにするために何が必要か？ 		
展望	<p>まず、「音楽のどんな良さを生徒に伝えたいか」が教員自身の想いとして大切だと思う。</p> <p>45分の活動の中で、常に目に見える成果が無くても、入学当初と2学期後半の声を比べると、響きや調和が良くなっており、感じ取る力も伸びている。どんな指示を出したか、どんなジャンプ課題を与えたか、の根っこに、「どんな動機で」ということが年間を通じて生徒の学びの姿勢に大きく影響すると感じた。</p>		

授業デザイン

平成28年10月6日(木) 7校時
授業者 前川 卓郎

1 授業科目	コミュニケーション英語 I
2 授業クラス	1年2組
3 授業教室	1年2組教室
4 授業内容	<p>○Lesson 6 Toothbrushing in Edo - Section2(pp.52) [VISTA English Communication I]</p> <p>5 授業のねらい(授業内容) (前時の授業内容) ○江戸時代の歯磨きについて知る。 ○新出単語を「日→英」のQRができるようになる。 ○本文の内容と文法を理解する。 ○本文①と②の強弱の場所(ポン・ポン)を教師と共に考える。〈学び合い〉 ○本文①と②を強弱をつけて音読し、正しい発音で言えるようにする。〈技能の獲得〉 (本時のねらい) ○本文③～⑤の強弱を「個⇒グループ⇒全体」で考える。〈学び合い〉 ○本文③～⑤を強弱をつけて音読し、正しい発音で言えるようにする。〈技能の獲得〉</p>
6 本日のジャンプ項目	○「自分たちで、ポン・ポンが来る語を考えよう」(Decide Pon-Pon words by yourself.)
7 授業の進行	<p>(1) Warming-Up: 新出単語の Vocabulary Output + ①②の音読 (2) Jump Task: ③～⑤のポン・ポンの場所を考える 「個⇒グループ⇒全体」で考える。 (3) General Task: 音読(PPM)し、教師による評価(GGM)をする。 (3) ワークブックの「練習しよう」で振り返る。) ※(3)はどちらかを実施する。</p>

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年10月6日(木)	対象	1年2組 男子17名 女子13名 計30名
教科	コミュニケーション英語 I	授業者	前川 卓郎
ジャンプ課題	自分たちで、『ポン・ポン』の場所を考えよう		
成果	<p>○「指導」から「学び」へ 音声面を強化することは、生徒の自発的アウトプット(特に話すこと)につながると信じている。その音声面を強化するために、授業内では「発音指導」の一環としてリズムに乗って英文を正しい発音で暗唱させている。</p> <p>この授業では、教師がそのリズムを与えるというそれまでの指導から、「自分たちでそのリズムを考える」という学びへと発展(ジャンプの課題)させた。グループ内で実際に音読し、意味を考え、雰囲気確かめ…と試行錯誤の末強く発音される場所を考え、それぞれのグループでその位置を発表した。</p> <p>それまでの授業では、生徒は「リズムに乗ると覚えやすい」という実感は得ていたものの、「リズムはどのように作るのか」というところまでは考えていなかった。今回の授業を経て音声面に対してさらに敏感になれたと考えている。</p>		
課題	<p>○家庭学習への引継ぎ 音声面における指導は授業内が基本である。しかし、時間が限られている授業の大部分を音声指導のみに費やすわけにはいかない。よって、ある程度の技術を身につけた後は家庭学習へと引き継いでいかなければならない。今年度は生徒たちが自宅で学ぶことができる教科書の音声CDを購入しておらず、この点が最も苦勞した点である。家庭学習と授業とが有機的につながることで、生徒の音声面は飛躍的に向上すると考える。来年度に向けて整備したい。</p>		
展望	<p>○総合的な英語力向上へ 英語は「ことば」であり、ことばの基本は「伝える」ことである。しかし、英語学習の最初の障害になるのが音声である。日本語と英語とでは根本的に使用する音声異なるので、特別な訓練が必要である。しかし、その訓練とは日々の授業でできる。私たち教師が音声面をいかにこだわるか次第である。生徒たちは自身の発音が向上することを喜ぶ。苦しい訓練の末に、教師からOKをもらったときの生徒の笑顔は達成感の表れである。その「できた」を大事にし、そこを英語学習の出発点とし、最終的に「伝えたい」につなげていく。いつか他校の先生方に「西彼杵の生徒たちは発音がいいし、話すときに生き生きしてますね」と言われるような指導を続けていきたい。総合的な英語力とはこのようにして身につくと信じている。</p>		

授業デザイン

平成28年10月13日(木) 7校時
授業者 川上 和 希

1 授業科目	数学Ⅱ
2 授業クラス	2年1組(男子13名、女子11名 計24名)
3 授業教室	2年1組教室
4 授業内容	第5章 第1節 指数関数 (指数方程式・不等式)
5 授業のねらい	<p>○指数法則を利用し、指数方程式を解く。</p> <p>○底が1より大きいか、小さいかに注意して指数不等式を解く。</p>
6 本日のジャンプ項目	<p>○指数法則を利用して置換した指数方程式・不等式に取り組む。</p>
7 授業の進行	<p>(1) 問13で指数法則を確認しながら、指数方程式を解く</p> <p>(2) 問14で底が1より大きいか小さいかに注意して指数不等式を解く</p> <p>(3) 問で置き換えを利用する指数方程式・不等式に取り組む(ジャンプ項目)</p>

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年10月13日(木)	対象	2年1組 男子13名 女子11名 計24名
教科	数学Ⅱ	授業者	川上 和 希
授業内容	既習事項である指数法則を活用して、指数方程式・指数不等式を解く		
ジャンプ課題	置換を利用した指数方程式・指数不等式を解く		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・導入にあまり時間をかけないようにして、とにかく生徒たちに取り組ませた。簡素化した導入に不安はあったが、思いのほか生徒は取り掛かっているようだった。 ・指数法則に関する演習で定着できていたおかげで、取り組む意欲を高く感じられた。 ・授業時間のほとんどを班活動で取り組ませ、班内で停滞してしまったときに、適宜解法のヒントを提示することで、生徒は少しずつ解答に向けて近づくことができたと思う。 ・ヒントの与え方については、一度にすべてを教えてしまわず、生徒が取り組む部分を残すことで、指数法則の復習もしながら方程式・不等式に取り組めたように感じる。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの先生方による授業参観とご意見をいただいたことで、授業中の生徒の変化に気づかず見落としていた部分が多くあることがわかった。 ・苦手意識を持つ生徒や活動が停滞してしまっている生徒への働きかけが十分行えていなかった。 ・ジャンプ課題の提示を一斉に行わず、課題へ段階的に到達するような個人の能力差が表れてしまう性質のものだった。 		
展望	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中の生徒たちは活動をさせていると、つまづく・あきらめる・訊き合う・私語に走る熱中する…など、取り組む生徒たちに(良くも悪くも)変化が訪れるが、変化を見取る力をつける必要がある。日頃の生徒理解から大事にしていきたい。 ・活動が停滞していたり、意欲が減衰していたりする生徒など、見取った生徒に応じた適切な支援の種類を増やしていきたい。 ・困難な課題(ジャンプ課題)に対して一斉活動で協同学習を行えるような時間設定や教材提示の順序など授業の展開を工夫したい。 		

授業デザイン

平成28年10月20日(木) 7校時
 授業者 木田博子

- 1 授業科目 現代文B
- 2 授業クラス 2年総合コース
- 3 授業教室 3F多目的教室
- 4 授業内容
 - 詩「樹下の二人」高村光太郎
 - 使用教科書「精選現代文B」(三省堂)
- 5 授業のねらい
 - ・妻にとっての故郷の存在を、二つの詩を読み比べながら理解するとともに、作者にとって妻がどのような存在であったか考察する。
- 6 本日のジャンプ項目
 - ・第2・3・5連の内容から読み取れることを押さえ、作者の妻への思いにどうつながっているかを考察する。
- 7 授業の進行
 - ・詩の音読【コの字】
 - ・詩「あどけない話」を配付し、本詩との関連性を理解する
 - ・第2・3・5連の内容を読み取る【グループ・エキスパート班】
 - ・読み取った内容を、別グループで説明する【グループ・ジグソー班】
 - ・共有した内容から、作者の妻への思いについて考えを深める
 【グループ・エキスパート班】

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年10月20日(木)	対象	2年総合コース 男子15名 女子17名 計32名
教科	現代文B	授業者	木田博子
授業内容	高村光太郎の詩『樹下の二人』の読解		
ジャンプ課題	第2・3・5連の内容から読み取れることを押さえ、作者の妻への思いにどうつながっているかを考察する		
成果	<p>本詩の授業の導入として、前時に『レモン哀歌』を配付、さらに本時で『あどけない話』を配付し、智恵子にとっての故郷という存在への理解から本詩へ入っていった。言葉が難解であり、詩独特の隠喩表現も多く、総合コース(主に就職希望者)の生徒たちにはなかなか理解しづらいと思われる。とは言え、指導者主導の詩の読解授業など何の学びも生まれない。そこで、ジグソー学習を取り入れることにした。1学期にも短歌の単元で一度取り組んだが、たった31文字から作者の思いを読み取り、伝える作業をこちらの予想以上に生き生きと行っていた。今回の授業においては、作者と智恵子を取り巻く背景を確認した上で、難解な言葉については各エキスパート班で辞書を用いて調べ、割り当てられた連の内容を考えた後、ジグソー班に移動して読み取った内容を伝えた。理解に苦しむ生徒も、周りのつぶやきに助けられたり、ジグソー班へ二人で移動することで、確認しながら安心して説明したりすることができていた。</p>		
課題	<p>・言葉の難解さにとらわれすぎて、その先にある作者の思いについて考えを深める前に諦めてしまう生徒がいる。モチベーションを高めるとまではいなくても、「わからない」→「でも周りが何か言ってるから聞いてみようか」くらいの気持ちを継続させるためには、協同学習が不可欠であるが、そこでの学びに有効な関わり方を今後も模索し続けなければならないと感じている。</p> <p>・ジャンプの課題について、詩の平易な部分から作者の妻への思いは読み取れないことはないが、その思いの深さは言葉の深さに入り込まないと見えてこないものである。夫の、妻への思いという興味をひくテーマだからこそ、難解でも協働の力を信じて、思い切った課題設定をするべきである。しかし、素材によっては生徒の意欲をそがな程度のハイレベルの度合いを探し当てるのが難しい。動きがなくなると、こちらが待ちきれずにヒントを与えすぎてしまう。沈黙を恐れない勇気は今後も引き続き課題である。</p>		
展望	<p>「学びの共同体」のスタイルを取り入れて、生徒は1人で難しい課題に向き合う不安から解放され、仲間とともに学び合う学習の形に安心感や充実感を覚えていたように思う。しかし、たとえ優れた学びのスタイルであっても、毎回同じ流れや方法だと生徒はマンネリ化してしまい、学ぼうとしなくなることもさえる。基本的には同じ方法であっても、課題の立て方、発問の順番、コの字型やグループの効果的な取り入れ方に工夫を凝らし、「小さな意外性」を絶えず与え続けていきたいと考えている。</p>		

授業デザイン

平成28年10月27日(木) 7校時
 授業者 本多信吾

- 1 授業科目 化学
- 2 授業クラス 3年1組(3年探究コース 理系)
- 3 授業教室 化学室
- 4 授業内容 ○有機化合物の性質等の確認
○組成式、分子式の決定、有機化合物の推定
- 5 授業のねらい
 - ・有機化合物(アルコール、エーテル、アルデヒド、ケトン等)の性質について確認する。
 - ・還元性の有無を調べるために、班ごとに銀鏡反応の実験を行う。
- 6 本日のジャンプ項目
 - ・問題中の化合物をすべて推定する。
- 7 授業の進行
 - ・<問題1>にて、有機化合物の性質を確認する。【個】のち【班】
 - ・実験を行う。【銀鏡反応】【班】
 - ・<問題2>を解く。【個】のち【班】

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年10月27日(木)	対象	3年1組 理系 男子5名 女子5名 計10名
教科	化学	授業者	本多信吾
ジャンプ課題	実験による有機化合物の推定		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・既習したことについてノートを見ながら実験に取り組んでいたため、復習を兼ねられた。 ・教科学習の得意、不得意の関係なく、班で役割を分担し、協力して実験をすすめていた。 ・机間巡視をしながら、プリントの問題(既習の問題)に対する生徒の答えを確認し、進ちよく状況を把握できた。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項が定着していないため、ひとつひとつ調べながらの学習になり、肝心の実験時間や結果から化合物を推測する時間が十分に取れなかった。結局、実験を進める上で、必要な事項を確認する必要があると思っていたが、既習の問題について、ひとつひとつ調べないとわからないのであれば、いっそのこと既習の問題は無しにして、実験(応用)から取り組んだほうが良かったのかもしれない。 		
展望	<ul style="list-style-type: none"> ・当クラスは、「学びの共同体」スタイルの学習を身につけた生徒達で、協働しての取り組みに抵抗がなかった。全員がいろんな視点から興味を持ち、実験に取り組んでいたと思う。課題の中でも触れたが、今後は基礎基本を一旦スキップして、ジャンプを経験し、そこから生徒が自ら基礎基本を学ぶという形を考える必要がある。 		

授業デザイン

平成28年11月17日(木) 7校時
 授業者 松尾雅彦

1 授業科目	数学 I
2 授業クラス	1年2組 (男子17名、女子13名 計30名)
3 授業教室	1年2組教室
4 授業内容	3章 図形と計量 2節 図形の計量 3 三角形の面積
5 授業のねらい	<p>○三角形の面積を求めるためには何が必要か理解して、それを求める。 ○三角比の既習の内容との関連について確認し、それを活用する。</p>
6 本日のジャンプ項目	<p>○一般の四角形の面積を工夫して求める。 ○3辺の長さが与えられた三角形の面積を求める。</p>
7 授業の進行	<p>(1) 小学校時より利用している三角形の面積の公式を確認する。</p> <p>(2) 2辺の長さとはさむ角から三角形の面積が求められることを知る。</p> <p>(3) 大切な角の三角比を確認しながら三角形の面積を求める。</p> <p>(4) 一般の四角形の面積がどのようにして求められるか考える。 (ジャンプ項目)</p> <p>(5) 3辺の長さが与えられた三角形の面積を求める。(ジャンプ項目)</p>

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年11月17日(木)	対象	1年2組 男子17名 女子13名 計30名
教科	数学 I	授業者	松尾雅彦
授業内容	3章 図形と計量 2節 図形の計量 3 三角形の面積		
ジャンプ課題	一般の四角形の面積を工夫して求める。		
成果	<ul style="list-style-type: none"> 多くの生徒が、「三角比」に入ってから新しい用語、定理の登場でやや難しそうに感じていたが、小中学校の数学の内容からの発展であることを認識して、また正面から問題に向き合おうという姿勢が見られたのが一番の成果である。 基本的な問題の復習を通して、数学の問題を解くためには「求めるべきものは何か」「何が与えられていて、何が必要であるか」を正しく把握することが重要であることを理解させることができた。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> 導入の仕方については、生徒の興味を引くものを準備して、その後の展開に繋がるものを選んだところは正解であった。しかし、公式の説明などではどうしても簡潔ではなかったため、生徒の学びが中断してしまった。 綿密に計画を立てて授業を行うことにより、学級全体の雰囲気や姿勢は以前より改善されるということが実感できたが、それを苦手意識の強い生徒まで拡げていく困難さも再認識した。 		
展望	<ul style="list-style-type: none"> 本時に設定したジャンプ課題は、予想以上に生徒の活発で積極的な学びに効果があり、数学の内容に関心を持たせることができた。今後も、そのようなジャンプ課題の設定に心掛けたい。 個人的には、学びの共同体の取り組みがかなり遅れてのスタートであったという反省があったが、本年度は授業参観、授業研究の回数も多く参考になることもたくさんあったので、さらに充実した実践を行っていきたい。 		

NIIE 中心授業デザイン

平成28年12月20日(火)

1. 授業科目 政治経済
2. 授業クラス 2年2・3組 (総合コース 男子17名・女子16名)
(注) 総合コースとは就職希望者を中心とする学級です。一部、美容などの専門学校を希望する生徒もいるようです。
3. 授業概要 体育館アリーナ (※中心授業)
4. 授業内容 成人年齢を18歳以上とすべきか?
『高等学校政治・経済』(第一学習社)「民主政治の基本原則と日本国憲法」

5. 授業のねらい
 - (1) 新聞を資料として、自分の考えを、根拠や考えられる事柄をあげながら発表できるようにすること、小論文作成に必要な論理的な思考能力を養う。
 - (2) 新聞を通して、政治・経済の勉強が身近な問題であることをあらためて認識できるようにする。
 - (3) 生徒が、生徒同士で意見を聞きあう中で、学びの共同体を形成し、考えを深める。

6. 本時のジャンプ項目
「成人年齢が18歳以上になった場合、日本の若者の意識はどのように変わっていくことだろうか?若者の考えを述べなさい」

7. 本時の授業計画

生徒の学習内容	教師の発問・指示・説明	授業形態
導入 5分 ①長崎県の18歳の投票率を参考にし、そこから「成人とは?」という命題に入っていく。	【質問】 「憲法、何故から成人だと思っている?」 【説明】 「7月の参議院選挙から、参政権が18歳に引き下げられました」 「今日はね、その成人年齢を選挙権と同じように18歳以上とするべきか?それを今日のテーマにします」	【コの字】
共有 課題 10分 ②共有の課題 ③論理コミュニケーションの手法を用いた自分の意見を、グループの中で説明することによって整理していく。	【指示】 「成人年齢を18歳以上にすべきかどうかについて君の意見→その根拠→考えられる具体的な事例を、グループの中で時計回りに順番に発表していこう」 「いつも言っていることだが、注することがある。グループの中で、話を聞いて参考にしてください。」	【コの字】 教師は 机回し監視

生徒の学習内容	教師の発問・指示・説明	授業形態
発表 5分 ④成人年齢18歳以上について、自分でまとめた意見を発表する。あるいは他人の意見に耳を傾ける。	【指示】 「では何人かの人の意見を聞いてみよう。〇〇君、君の意見を発表してきてください」	【コの字】
ジャンプ 課題 10分 ⑤ジャンプの課題 ④グループを作り、日本の若者の近未来の姿を予想するなかで、学びを深める。	【指示】 「さて、今日のジャンプはね、成人年齢が18歳以上ということになった場合、5年・10年とすると、うちに日本の高校生・大学生・高校を出てすぐに働く若者の意識はどのように変わっていくだろうか?いや、どう変わっていくか考えるえないだろうか?」	【コの字】 教師は 机回し監視
発表 10分 ⑤自分でまとめた意見を発表する。あるいは他人の意見に耳を傾けて聞く中で学ぶ。	【指示】 「では〇〇君、君の意見を発表してみてください」 「他の人は周囲の人がどのように考えたか、耳を傾けて下さい」	【コの字】
まとめ 5分 ⑥学び合うことの意義を再確認する。	【説明】 「なぜ話し合ったりすることが大事なのだろうか?」 「それは平和な社会を築いていくためなのですよ」 「これは本日、これから、両岸祥高政で講演をされる藤岡中亮五の『ニッポン・サバイバル』という本の中に、平和な社会を築くためには、身近な人と話すことこそがまず必要とあります。仰々しいことをするのではなく、まずは身近な人と語り合うこと。それが平和な社会を築く第一歩なのです。」	【コの字】

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年12月20日(火)	対象	2年2・3組 男子17名 女子13名 計30名
教科	地歴公民科(政治・経済)	授業者	白山 修
授業内容	成人年齢を18歳以上とすべきか?		
ジャンプ課題	成人年齢が18歳以上ということになった場合、5年・10年とするうちに日本の高校生・大学生・高校を出てすぐに働く若者の意識はどのように変わっていくだろうか?		
成果	<ul style="list-style-type: none"> 生徒達に論理コミュニケーションの設計図を記入させることによって、生徒達が、自分の意見を論理立てて発表できたように思います。 また生徒達は根拠を明確にして自分の考えをまとめ、相手にわかりやすいように説明しようと努力していたように思います。 		
課題	<p>以下のような指摘がありましたので、今後に活かしたいと考えます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「生徒は何を学んだのか不明。楽しい学びとは感じられない」との指摘もありました。 「ジャンプの課題について考え他者の意見を聞いて自分の意見がどのように深まっていくのかももう少し見たかった」 「ただ、授業者が生徒が発言するときしっかり生徒を見て傾聴しその声を受け止める、共有するようにして頂きたいと思いました」という指摘もありました。私が時間を気にしていたため、ついつい生徒の声を受け止めきれずに進めていました。そこは反省しなければなりません。 <p>※「質問する」「付け加える」「反論する」等の議論をしていくディベートまで持ち込む指導ができませんでした。ディベートまで進めるのは、私の能力では、現在のところ難しいと感じています。</p>		
展望	<ul style="list-style-type: none"> 今後も政経の授業を通して、新聞に日頃から親しませる地道な取り組みをしていきたいと考えます。そして、社会で問題となっている論点について考える習慣を身に付けさせたいと考えます。 「18才で成人」という問題に生徒はしっかり向き合い、葛藤の中にも自分の意見を論理的に整理しようと試みる中で、生徒達は、公民としての資質を養っていけるものと思います。 今後、自分の意見を文章にしていくことで、小論文の指導にも役立つものと思っています。 		

授業デザイン

平成29年1月20日(火) 5校時
授業者 白山 修

- 1. 授業科目** 世界史A
- 2. 授業クラス** 1年2組(男子17名・女子13名)
- 3. 授業教室** 1年2組教室
- 4. 授業内容** 『高等学校世界史A』(第一学習社)
「アジア諸国の変貌と近代の日本 ⑤清の動揺 ⑥明治維新と東アジア」
「帝国主義の時代 ④中国分割の危機と日本」
- 5. 授業のねらい**
 - 洋務運動には、どのような特徴があったのか、明治の殖産興業政策と比較して、教科書をもとに考えていく。
 - 日清戦争の結果、中国国内ではどのような対応がみられたか、教科書をもとに考えていく。
- 6. 本時のジャンプ課題**
「清朝はなぜ近代化できなかったのか？洋務運動と明治維新を比較しながら、君の考えを論じなさい」
- 7. 授業の進行**
 - 「洋務運動はなぜうまくいかなかったのか？」という本時の授業の目標を提示。
 - グループで早稲田大学政経学部のを少し変えた問題「洋務運動と明治維新を比較しながら、君の考えを論じなさい」にチャレンジしてみる。

本時のジャンプ課題

 - 洋務運動がなぜうまくいかなかったのか？自分でまとめた解答を発表する。また他人の解答に耳を傾ける。
 - 「立憲君主政」を問う一橋大学の問題にチャレンジしてみる。
 - 歴史を学ぶことの意義を再確認する。

【参考】市古宙三：お茶の水女子大学名誉教授『世界の歴史13 帝国主義の時代』
「洋務から変法へ」(中公文庫)
並木頼寿：東京大学教養学部教授・井上裕正：奈良女子大学文学部教授
『世界の歴史⑨ 中華帝国の危機』「秩序の再編と洋務運動」(中央公論社)
片山杜秀：慶応義塾大学法学部教授
『大学入試問題で読み解く「超」世界史・日本史』(文春新書)
祝田秀全：代々木ゼミナール講師『歴史が面白くなる東大のディープな世界史2』
(中経出版)

研究授業【振り返りシート】

日時	平成28年1月24日(火)	対象	1年2組 男子17名 女子13名 計30名
教科	世界史A	授業者	白山 修
授業内容	アジア諸国の変貌と近代の日本 ⑤清の動揺		
ジャンプ課題	清朝はなぜ近代化できなかったのか？洋務運動と明治維新を比較しながら、君の考えを論じなさい。		
成果	<p>成果はほとんどなく、恥ずかしい限りです。</p> <p>ただ同僚の先生方に、あわてて計画した自分の授業をさらけ出すことで、先生方の授業を考えるたたき台にさせていただければと感じました。それが50を過ぎてしまった自分にできることだと思います。</p> <p>あと、毎時ジャンプ課題を設定しなくとも、「今日は共有の日」・「今日はジャンプの日」という設定の仕方でも可ということが確認できました。</p>		
課題	<p>講師の永島先生より以下のような指摘あり。今後活かしたいと考えます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「1人残らず50分ずっと学んでいるか？気付いて支援をしなければならない。学んでいない子はすべからず特別支援の対象である」 ・「ジャンプ課題が適切なものであれば、授業が終わっても生徒は帰らない。そのまま考え続ける」 ・「歴史の授業ではなく、資料の“要約”の授業になってしまっている。“要約”の学びになってしまっている」 ・「“東アジアにおける近代化とは何か？中国と日本を比較しながら定義せよ”というジャンプ課題にした方がよかった」 		
展望	<p>今後、「これぞ学びの共同体の授業」のモデルといえる授業を自分の目で見学するか、DVDで見ることによって、自分の授業の中で追試(実験)してみなければいけないと思います。</p> <p>(例)「下剋上はなぜ起きたのか？」 「田沼意次の改革は、なぜ江戸時代の三大改革に入らなかったのか？」</p> <p>上の(例)は永島先生が、学びの共同体方式の素晴らしい授業だったと紹介されていたものです。そこで以下のような率直な疑問が湧きました。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①どんな資料を使って授業をしていたのか？ ②生徒達はグループで、どのレベルの話をしていたのか？ <p>そのためにも、モデルとなる授業を、実際に見学するか、DVDで見たいのです。展望はそこから開けるように感じています。</p>		



まなびあい

016/6/30 (木) 第1号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也



「まなびあい」、はじめます。

本校で【学びの共同体】が本格導入されて2年目を迎えました。今年は「深化」の年だと思えます。昨年度はこれまでの一斉授業からの脱却を図り、まさに「進化」の一年でした。その中で多くの成果と同様に、数多くの課題が生まれました。それらの課題は、本校で【学びの共同体】を進める上で非常に大切な「種」だと思えます。その種をしっかりと育てていくことが、生徒の学びを高め、私たち教職員の指導力（コーディネート能力）を深め、本校での学びが「深化」していくために非常に重要なことだと考えます。

例えば「何をジャンプ課題とするか」という問い。様々な先行文献を参照しますが、『「学びの共同体」の実践 学びが開く！高校の授業』（2015 明治図書、佐藤学ほか）には、このような記述があります。

「学校を訪問して、先生方に最もたずねられることが、協同学習における課題のつくり方についてである。課題づくりが難しい、どのような課題がよい課題なのか、教科書の問題でもよいのか、具体例のリストがほしい、そういった切実な声である。にもかかわらず、いまだによい課題のリストとなるものは存在しない。それは形式化を恐れるためである。よいとされる課題が一人歩きすることを恐れるためである。これまで、流行と衰退を繰り返してきた教育における〇〇方式と、今行おうとしている試みは本質的に何が異なるのか。その一つとして、形式より『その心は』を大事にすることにある。協同学習は流行の方式ではない。「一人残らず」「質が高く」学ぶ教室を実現するという難易度の高いミッションのために、協同というものをどのように捉え、教師自身も同僚とどのように協同していくのか、そこにかかっていると考えているからである。」(p. 38・草川剛人)

本校には様々なキャリアをお持ちの先生方が揃われています。職員同士で教科はもちろん、教科の枠を越えて【学びの共同体】の核となる「ジャンプ課題」の在り方について「深化」させていくことが求められています。

他にも運用の方法や環境整備など、様々な課題がありますが、この「まなびあい」を通して皆さんと共有し、一緒に考えていきたいと思えます。

「第4回公開授業研究会」お疲れ様でした！

去る6月17日（金）に行われました「第4回公開授業研究会」では、先生方には事前の準備や公開授業など様々な面で大変お世話になりました。おかげさまで素晴らしい研究会となりました。講師の佐藤学先生から教えて頂いたことや、今回の研究会で蓄積された運営のノウハウを今後活かしていきたいと思えます。

ところで…先生方は職員室NASの『「学びの共同体」関係記録』の中にある、「参加者アンケート集約」をご覧になりましたでしょうか（教頭先生から案内がありましたか…）？是非ともご覧下さい。感じたことを近くの先生方とお話しするだけでも、同僚性も高まりますし、いいアイデアが浮かぶかもしれません。

◆校内アンケート結果◆（※抜粋）

- ・先生方のご協力のおかげで、冊子資料が前日までに完成してゆとりができてよかった。
- ・テニスポールの準備、木下先生や2学年の先生方、ありがとうございました。
- ・小さな気付きをその都度声に出し、確認しながら進めていくことが大事だと再認識しました。
- ・「職員のチームワーク」とか「先生方の「学びの共同体」というアンケートの言葉にもあるように、学びの共同体のねらいの一つ「教師間の同僚性の構築」を感じて頂けたことも良かったと思えます。
- ・質問があった上位層の手だてなど、また引き続き知恵を出し合って取り組んでいきましょう。
- ・多忙な中、全員がそれぞれの役割を責任を持って果たしていて、チームワークの素晴らしさを感じました。チーム西彼杵の底力は見事です。また各公開授業の実践も、蓄的な準備の上の見事な授業でした。お疲れ様でした。
- ・外部からの参加者が、小規模校なのに運営がここまでできるのかと感嘆していました（授業をやりながらですらね）。大変ですが、「公開」することで私たちの立ち位置、在り方が分かり、リフレクションが可能になります。力を合わせて（でもできるだけ労力を分配して）頑張りましょう。
- ・校内での「学びの共同体」実践そのものについての研修が必要だと思う（「授業研究」ではなくて…）。無理はあるが、業務をできるだけ「学びの共同体」実践のものを中心に再構成する必要がある。
- ・もう本校は長崎県の「パイロットスクール」になりつつあります。そのスクールアイデンティティを大切にしていきたいです！
- ・駐車場は130名でも校内にギリギリ収まりました。分教室の先生方も頑張って下さいました。
- ・県内でも西彼杵の名前が表に出てくれば、生徒・保護者の意識も変わると思えます。
- ・昨年実施していく中で、不安やもどかしさを感じることもありましたが、今回の公開授業で見た生徒達の様子や佐藤先生の講話から、少し前向きな気持ちになりました。



まなびあい

2016/7/27 (水) 第2号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也



「田中先生の研究授業から考える」～「学び」と教材研究～

先日7月7日（木）、生物室にて田中先生による3年総合コース（3-2/3）の生物の研究授業が行われました。田中先生、大変お疲れ様でした！また、当日には平戸高校より4名の先生方が来校され、研究授業参観の前に福田校長先生と西村により、本校における【学びの共同体】の実施の状況と授業研究のあり方などについてレクチャーを行いました。なお、平戸高校の先生方はその後の授業研究にも参加され、大変有意義な時間をお互いに共有できたのではないかと考えます。

さて、表題の「田中先生の研究授業から考える」についてです。私（西村）にとっては日頃の自身の甘さについて大変考えさせられる授業でした。

今回の研究授業の対象は、「総合コース」のクラスでした。先生方が御存知の通り、様々な特性や個性を持った生徒によって構成されるクラスであり、語弊があれば申し訳ありませんが、いわゆる「指導になかなか乗ってこない生徒」や「基礎的な学力が身につけていない生徒」が多いクラスです（昨年度は西村が担任をしましたが、なかなか指導を徹底させることができませんでした…）。

そのような特性を持つ生徒たちが、一生懸命に微生物を観察したり、難しい縮尺計算に取り組んでいたのです。そして実験器具を大切に扱い、その収納を一生懸命に取り組んでいたのです。「～できない」や「やる気が無い」とレッテルを貼られがちな子どもたちが、田中先生の入念な教材研究と授業環境の設定と「協同すること」によって、生き活きと「学んで」いたのです。

私は、田中先生の授業を参観させていただき、自身の授業や教科に対する認識の甘さを痛感しました。田中先生は（すぐ近くの席なので分かるのですが）、生徒が理科に興味を持つことができるために、そして興味を入口に、理科の力を高めるために様々な教材を準備していらっしゃいましたし、これまでもされてきました。それに対して自分はどうか…非常に恥ずかしい限りです。もしかしたら意識的にも無意識的にもどこかで自分の準備不足や教科指導力不足を棚に上げて、学びが深まらないのを生徒のせいにしていた面があったのかもしれませんが。

【学びの共同体】は「課題が命」です。もっと言えば、「ジャンプ課題が命」です。生徒たちに「ど

のような力を」「どのような課題を通して」保障していくかは、教科を問わず重要な問題だと思います。

生徒の「学び」の保証のために、我々は「どのような環境を設定し」「そのような課題を提示し」、また「どのように生徒の学びを深化させてくか」…まだまだまだまだ…私たちには読むべき本や理解すべき理論、整えるべき環境や全職員のコンセンサスの統一など、課題は山積みです。先生方と今後も、「生徒のために」協同して考えていけたらなと思えます。

★★1学期アンケート集計（中間報告）★★

先日は大変日程が立て混んでいる中に、【学びの共同体】に関する生徒アンケート並びにアセス検査へのご協力、誠にありがとうございます。

現在、担当が集計を行っております。職員研修の際に詳しくはご報告差し上げますが、自由記述欄を見てみると大きく分けて下記の傾向が見られます。

- ①他者との関わり合いが楽しい。
- ②もっと班で協議する時間と機会が欲しい。
- ③一斉授業の時よりも集中できる（他の人の目線があるので）。
- ④以前より気軽に（安心して）授業に参加できる（皆と一緒に考えたり話をできるから）。

上記は肯定的意見をのみ取り上げましたが、否定的意見は全体の中で非常に少ない割合で、しかも意義や目的及び学校生活にもともと不信感を抱いているような印象を受けるものでした。

【学びの共同体】の意義や目的が生徒に理解されていない原因は、PJチーム（特に全体を牽引できなかったチーム）にあります。生徒と先生方に変な申し訳なく思えます。大部分の生徒は「協同学習」、すなわち【学びの共同体】を求めています。そのような生徒に対し、私たちは何ができ、何をすべきなのでしょう。

職員研修では、そのようなことを全職員で確認できればいいと考えています。宜しく願いいたします。

《第3号のお知らせ》…8月10日（水）発行予定
○鹿児島県立指宿高等学校 学校訪問報告（川上t）
○「学びの共同体」研究大会 in 幕張 参加報告（西村）
○その他

まなびあい

2016/8/10 (水) 第3号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也

鹿児島県立指宿高等学校を視察してまいりました

先月7月12日(木)に学校訪問をさせていただきましたので、その一部を紙面にてご報告します。

同校は、生徒数が1学年100名程度、職員数は教諭24名(数学科職員5名)と本校より若干多い規模の学校です。

通学生徒は地元中学校からの進学が半数以上を占め、徒歩・自転車などによる自力通学生徒が6割程度、JRを利用する生徒が4割程度(JR駅までは徒歩5分程度)となっています。



同校は数学科が先駆けてアクティブラーニングを始めて今年で3年目、1学年3学級を4つの習熟度に分け、同じ時間に1つのフロアで授業を実施していました。このとき、授業者4名と残りの数学科1名がT2という形で4つのクラスを行き来しながら生徒の学びを支える役割を担っていました。



↑ 演習の合間に廊下で生徒の状況を相談する様子



授業の進め方については、板書を基本的に生徒に取らせることなく、演習の際に疑問や不明な点がある生徒を起立させ、教室を自由に動き回りながら納得いくまで確認させあう形で授業を展開していました。教員は、生徒がわからない点が多くある場合に着席させ、解法のヒントとなるものを適宜示していました。



指宿高校数学科作成のレジメより抜粋

- ・科会の時間、空き時間、授業時間のちょっとした際にも他の先生と相談や、授業見学をしている
- ・並列授業を行うことで複数の学年に関わっているため、共通した話題が多い
- ・毎学期に生徒アンケートを実施し、生徒の要望を少しでも反映できるように工夫している
- ・とにかく生徒や教材のこと、しょうもない話等いろいろな会話をしている

本校で実践している「学びの共同体」とは一線を画すスタイルだと感じましたが、参考とできる部分もあるかもしれません。録画データとレジメを下記アドレスに入れておりますので、よろしければご覧ください。

¥¥NS115AD011¥usb2¥「学びの共同体」関係記録¥【学びの共同体】¥04_他校視察・各種研修会¥h28¥2016_712_鹿児島県立指宿高等学校訪問

(以上、川上先生に御寄稿いただきました)

第14回学びの共同体研究会参加報告

1. 期 日 平成28年7月30日(土)
31日(日)
2. 場 所 幕張国際研修センター
3. 参加者 福田 雅子 教頭先生
西村 卓也
※他に長崎県から、林田誠一 平戸高校校長先生も参加されました。
4. 日 程 30日(土)
講演①(佐藤学氏) 動向と概論
講演②(申智媛氏) 海外の報告
授業DVD視聴
リフレクション
夕食(交流会)
31日(日)
高校分科会
講演③(佐藤学氏)
まとめ(佐藤学氏)

☆今回の研究会は講演資料が無い(スライドによる説明や研究協議がメイン)、箇条書きでメモしてきた内容の一部を伝達いたします。

「学びの共同体」における「質の高い学びの条件」

- ①「話し合い」ではなく『聴き合い』へ
 - ②「教え合い」ではなく『学び合い』へ
 - ③「意見の交流」ではなく『協同による探究』へ
- ※以上の項目が保障される教室は、「ささやき」や「つぶやき」がある「静かな環境」である。

一斉授業は130年前の教育システムである

→先進諸国では日本と中国と韓国のみ実施されている。しかも、中国に於いては貧しい農村部でのみ行われている。東アジアでは、国策として「学びの共同体」を推進している。

「探究できる」教室の条件とは？

- ①聴き合える教室
- ②ジャンプ課題が大好きな子どもたち
- ③誰一人孤独にしない教室

「学び合い」を実現し得る学級の姿を作るためにはどうしたらよいのか？

→「共有課題」と「ジャンプのある課題」によって構成される授業実践を積み重ね続け、生徒の見取りに対する努力を重ね、教師自身が「学び」についての研究書を読みながら、学び姿勢を持ち続けなければならない。

「聞いていない」とか「集中していない」とか、何か問題のある行動や状況が発生した場合は、それがどのような時に起きたか観察する必要がある。

→多くの場合、こどもの表情が暗くなったり授業から逃走したり寝そべるのは、「教師が話しているとき」である。「説明が長い＝熱心な教師」ではないことを理解しなければならない。

教師の立ち振る舞いについて(学びの場と関係をデザインするために)

- ①言葉のボリュームや情報量、テンションの高さや動きの高い頻度が、子ども達の学びを「阻害」している(辛さを感じさせる)ことにつながっていることを教師は自覚せねばならない。
- ②東京都内最底辺小学校は、「教師のテンションを下げる・教師の言葉を少なくする・ペアワークを行う」ことを2ヶ月間(!)続けただけで、学校は激変した(その後、数年で都内のトップ校になった)。
- ③教師のポジショニング(どの場所において、どのタイミングで生徒に関わるか)は非常に重要。「つなぐ」という教師の立ち位置をもう一度確認して欲しい。

どうして「ジャンプの課題」の設定が難しいのか？

→海外の先生方は原則として教師は修士号以上であり、教科や授業法及び教育学についての高い教養を持っているため、子どもの状態に合わせて適切な課題を比較的容易に設定できる。要するに、ジャンプの課題の設定が難しいのは、「教科及び教育に対する教養が不足しているからである」。これからは更に子どもの学力や能力、状況に合わせてと、大変だが「産みの苦しみ」を味わいながら努力を重ねるしかない。

「おせっかい」と「おかげさま」の違いに敏感になる

→「教えて」と言われる(身体からのサインを含む)まで関わらない。必要なときに協同してくれる他者がいるからこそ、「おかげさま」になる。「おせっかい」は「教え合い」の時に出る。

教材研究は、指導案づくりのためではなく、学びの活動(方法や構造)を見出すためにこそ行わなければならない。

→「教えるためのよい教材」ではなく、「子どもが考えるのに適している教材」とは何かを考えなければならない。そのために、教師は自分の教科に関する教養や知識を身に付け、教材と「じっくり対話する」ことによって最適な教材を設定し準備しなければならない。

高校の授業は、学びのプロセスを重視していない

→結果重視だと得意な子は謙虚さを失い、苦手な子は(学習が)嫌になる。また、大学入試はプロセスを重視する内容にシフトしており、従来の知識偏重型学力では対応できない。

今回の研修では、非常に自分の痛い所を突かれるような内容ばかりでした。教科に対する専門性や【学びの共同体】に関する事項についての日頃の自分の不勉強を心から反省させられました。

今一度本校が目指すものを見つめ、基礎基本に立ち返り、日々の業務などもあるとは思いますが自分を厳しく見つめ、危機感を継続しながら日々の「学び」にあたらねばならない、またそれが教職という職にある者の使命であると、思いを新たにしました。

次回発行予定日：8月24日(水)

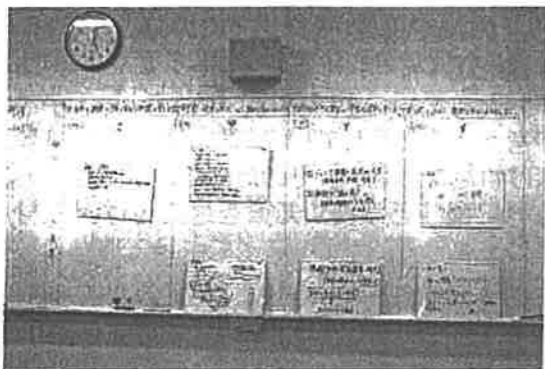
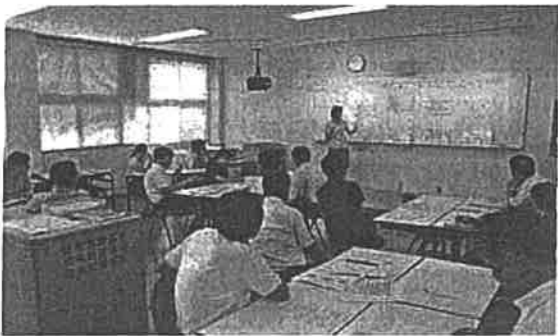
まなびあい



2016/8/24 (水) 第4号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也

8月18日(木) 職員研修を実施しました！



先生方の熱意のおかげで、非常に実りある研修となりました！誠にありがとうございました。

今回の研修では、「発展的な課題や学習に向かう意欲を育てる協同学習の授業を創るために教師に求められる役割」と、「意欲的に思考し協同して学習する姿勢を育てる授業を創るために教師に求められる役割」について、先生方を2グループに分けて研究協議を行っていただきました。大きく分けて以下の3点がポイントではなかったかと思えます。

①ジャンプ課題の在り方

- ・生徒の限界を教員側が決めない。

- ・生徒達が“困る”ような課題を出し切れていない(これができないとマズいぞといった感覚を持たせるようなもの)。
- ・到達目標をどうするか。
- ・「結果」ではなく「プロセス」を重要視する視点への変更が必要。…など。

②教師の関わり方

- ・生徒の学び合う人間関係を補助するために。
- ・教員が話し過ぎ(もっと生徒を信頼する。生徒と教材、生徒と生徒を“つなぎ—もどす”ファシリテータとしての役割を勉強しなければならない)。
- ・“見取り(診断)”と“支援”のタイミングを教師が磨く。
- ・進度を重視するが故に途中で思考を遮ってしまったり、教員が考える枠の中に押し込もうとしてしまう(一斉授業に)。…など。

③教員の専門性の向上

- ・教育や教科に関する読書や研究の必要性(佐藤先生からも、『日本の先生方は教科、教育に関する研究が足りない』との指摘)。
- ・「自分は出遅れているから頑張らねば…」という声も聞かれました。

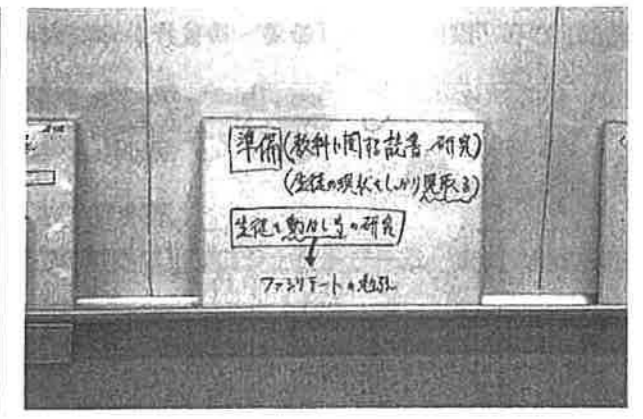
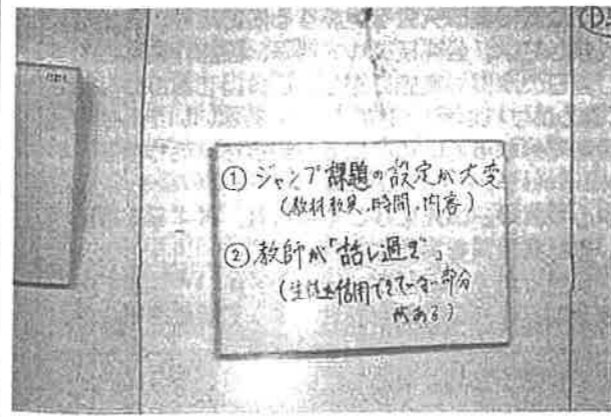
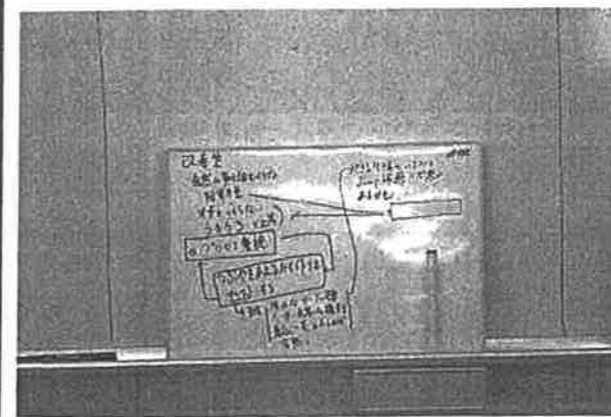
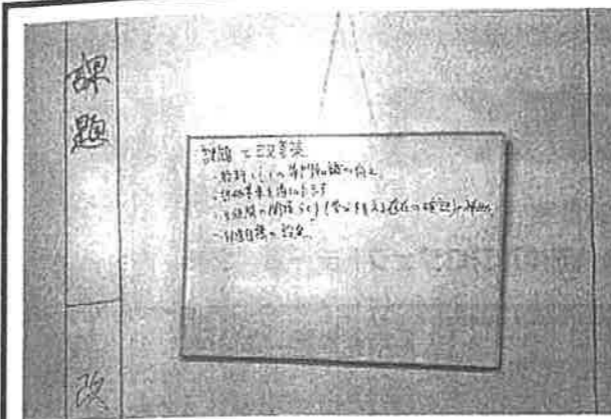
最後に校長先生から総括と指導助言として、

- (1) 本校は非常に注目されており、かつ生徒も大変良い方向に向かっている。
- (2) 今後は「西彼杵高校の【学びの共同体】」の形を模索していかなければならない。
- (3) 教科の特性もあるかと思うが、例えば単元の全ての時間ではなく、骨子の時間にジャンプの課題を入れるなど、工夫をして欲しい。

といったお話がありました。今後もこれまでの積み重ねと反省点を活かして、「西彼杵生」のために、【学びの共同体】の在り方について、本校職員一丸となって研究と実践を積み重ねていきたいと思えます。宜しくお願いいたします。

※裏面に、各班のホワイトボードの写真とプロジェクトチームから提案させていただいたことを掲載しておりますので、ご覧下さい。

次回発行予定日：9月7日(水)



提案事項1⇒下記の事柄を、生徒に強調して伝える。
「積極的依存性」…分からない時に分からないと言える。
「共感的受容性」…他者の考え方を受け止めること。
「建設的応答性」…このように考えればいいんじゃないと言えること。

提案事項2⇒教室環境について、下記の事柄を実践する。

- (1) コの字型配置の修正
⇒それぞれの机はくっつけて配置する。
- (2) 机のフックに鞆などの荷物を掛けない
⇒鞆や補助バッグはロッカーの上へ。嵩ぎれない分はロッカーの前などに整然と並べて置く(定期考査時のイメージ)。
- (3) 本校独自の「学びの作法」※仮称の教室室内への掲示
⇒文案は未定、今後のプロジェクト委員会で検討し、全職員にお示りする。

★3年2組教室では、さっそく生徒に意図を説明の上、机をくっつけて配置しました。ご参考にさせて頂き下さい。

まなびあい

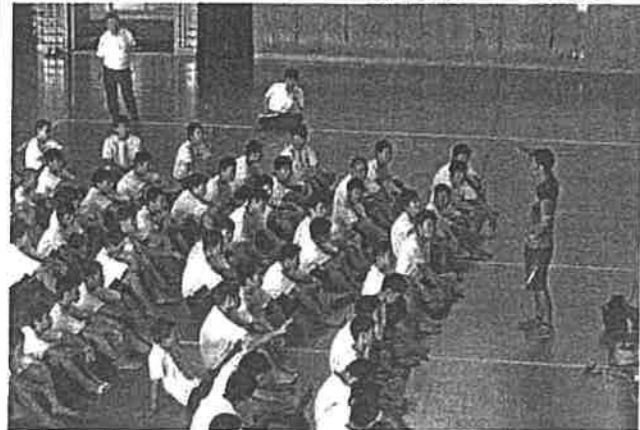
2016/9/7 (水) 第5号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也



田川先生の授業から学ぶ

～生徒の学ぶ意欲を引き出す「場面設定」と「教材」～



去る8月26日(金)、田川先生による体育の研究授業が行われました。体育大会の準備で大変ご多忙の中、授業を提供して下さいました田川先生には、心から感謝申し上げます。本当にお疲れ様でした！

西村は10年経過研修のため不在でしたので、授業や授業研究会の様子は記録動画や写真でしか見ることができていませんが、田川先生の明確なビジョンと綿密な計画と準備に裏打ちされた、生徒の意欲が引き出された素晴らしい授業であったと思います。

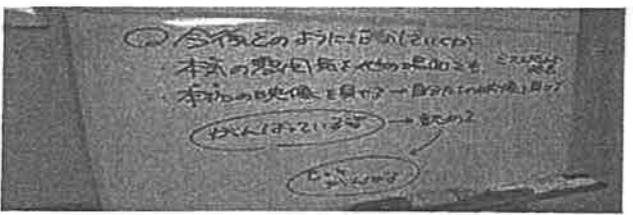
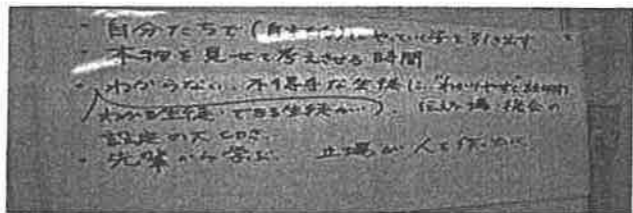
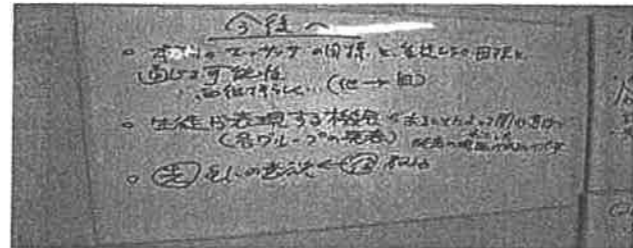
今回の授業で学んだことは、「場面設定」と「教材」です。生徒が協同して主体的に学習活動を行うために、「他者に指導をする(伝える)場面」と「発表する場面」が有効であり、その前提として「本物(今回の場合はエッサッサの映像)に触れる」ことが大切だと考えました。また、授業者にも「子ども達に触れさせるべき“本物”とは何か。そして、いつ触れさせるか」という、深い専門性に基づいたビジョンを持つことが重要であることを実感することができました。



私たち教員は、どうしても授業や学習がうまくいかない原因を子ども達に押し付けてしまいがちですが、いわゆる実技教科から学ぶべき事は多い気がします。「なぜ子ども達が熱中して学ぶのか」、「なぜ意欲的に学んでいるのか」。私自身、佐藤先生が6月の講演会で言われたように、まだまだ教科の専門性が足りないと思います。今回の研究授業やこれまで参観させていただいた授業と授業研究を活かし、「熱中して学ぶ」「意欲的に学ぶ」授業空間を目指していかなければならないと考えています。

今月は15日(木)に的野先生、20日(火)に真鳥先生の研究授業が予定されています。実技系教科の授業からまた多くのことを学び、自分の授業に還元していきたいと思えます。

以下に、田川先生の授業研究会に於ける「今後について」の各グループの協議結果を掲載いたします。



■お知らせ■

「12月20日(火)の第5回公開授業研究会について」

上記の公開授業研究会を実施するにあたり、先生方に於かれましては、公開授業や大掃除、設営作業などの事前及び当日の準備や実施に際し、ご負担をお掛けしますが、ご協力頂ければ幸いです。宜しくお願いたします。現段階で分かっている事柄をお知らせいたします。

- ①中心授業は白山先生がご担当され、NIEを活用した提案授業を実施される。
- ②「公開授業⇒中心授業⇒講演会」という流れとなる予定。今後の打ち合わせによって変更の可能性。

時間割変更や公開授業のお願いに西村がお伺いいたしますので、その時には快くご相談いただくと助かります。お願いばかりで申し訳ありませんが、今回も先生方のお力をお借りしなければ運営できません。どうぞ宜しくお願いいたします。

次回発行予定日：9月21日(水)

まなびあい

2016/9/21 (水) 第6号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也



生徒が “何をしたいか(表現したいか)” から始まる「学びのデザイン」 ～的野先生「社会と情報」から学ぶ～

9月15日(火)、的野先生による「社会と情報」の研究授業がパソコン室にて行われました。的野先生、お忙しいなか、授業を提供下さり、誠にありがとうございました。今回の研究授業及び授業研究も大いに勉強になることができました。

授業内容はExcelを用いた表計算の方法(COUNT関数・IF関数)で、最初に関数の使用法を共有課題として学び、ジャンプ課題としてこれまでに学んだ知識を用いながら問題を作成するといった内容でした。また、授業後の授業研究には佐世保商業高校より井上先生が参加され、本校の先生方と有意義な授業研究や意見交換、商業高校の施設や授業の実際についてお話をいただきました。

さて、今回の授業では表題として挙げさせていただきました、「生徒が“何をしたいか(表現したいか)”に授業デザイン(課題)を考えるヒントがあるのではないか。」という視点を考えることができました。これは私(西村)にとっては非常に新鮮な視点でした(当たり前な視点かもしれませんが)。勉強・研修不足で申し訳ありません。

生徒が「何が出来るようになる」ではなく、「何をしたい(できたい)と考えているのか」を出発点として、ジャンプ課題や授業デザインを考えることは、もしかすると現在、先生方が悩まれている【「学びの共同体」形式の授業の進め方】や【ジャンプ(共通)課題の在り方】について、何らかの解決につながるかもしれません。

また、「日頃では考えられない生徒の生き活きとした姿」についても言及されていた先生方もいらっしゃいました。それに関連して、「横並びの机配置の有用性」や「教員の関わりの在り方」についても議論されました。先般、教室の配置(くっつける)について先生方をお願いいたしました。やはり環境は大事ですね。今後も先生方のご理解とご協力、そして気付きやアドバイスを基に【学びの共同体】を更に発展・推進していきたいと思えます。



★毎日新聞(9月17日土曜日)の「新・教育の森(九州・山口版)」にて、本校の取り組みが大きく紹介されました！



本校の取り組みは、これまで長崎県内の報道機関で取り上げられてきましたが、いよいよ九州・山口地区まで範囲が広がりました。今後も生徒のために、西彼杵高校のために、先生方と研鑽を積んでいければと思います。

■実践「簡単」報告

(国語科・西村：センター試験向けの授業について)

センター試験(もしくは各種進路に向けて授業)に向けて、どのような形で協同学習を行っていけばいいか。大きな懸案事項でした。「教員がダラダラ解説を垂れ流すことなく、生徒同士が協同しながら主体的に課題を解決するためにはどうすればよいか」。現在、下記のような流れで授業を行ってまいります(主にセンター試験組)。

- ①演習
- ↓
- ②ペアで答えの確認
- ↓
- ③グループで答えの確認
- ↓
- ④全体で確認(模範解答を用いながら)

- 約束
- ①解答の根拠を示す
 - ②相手の意見を聴く
 - ③あらゆる材料を使う
 - ④沈黙しない

この方法が正しいかは分かりませんが、「協同」を何とか取り入れながらできないかを試行錯誤しています。

次回発行予定日：10月5日(水)



まなびあい



2016/10/6 (木) 第7号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也

「場の設定」の重要性

～真鳥先生「音楽Ⅰ」から学ぶ～

9月20日(火)7校時、真鳥先生による「音楽Ⅰ」の研究授業が音楽室にて行われました。また、今回の研究授業には長崎県教育センターより柳本指導主事も来校され、授業研究会まで参加頂きました。

これまで研究授業が保健体育・情報・音楽と、いわゆる「実技教科」の授業が連続していますが、やはり今回も、「場の設定」と「生徒の実態に即した教材教具の準備」に学ぶべき点がありました。

まず「場の設定」ですが、教室の前半分に椅子を配置し、後半分はフリースペースとされていました。また、黒板には楽譜のコピーが黒板狭しと貼付され、音楽室全体が「音楽(歌唱)に向き合うための空間」といった雰囲気設定されていました(当たり前のことかもしれませんが、当たり前のことを見直すことが大切なのかなと、【学びの共同体】に取り組む中で大切な視点かなと最近思っています)。

次に「生徒の実態に即した教材教具の準備」ですが、各パート毎に自分たちで練習を進めることができるようにCDとプレーヤーを準備されていました。それだけでも手間がかかることだと思いますが、更にそのCDからメロディだけでなく、真鳥先生の「さん、はい。」の声が聞こえてくるのです！その真鳥先生の声が入っているからこそ(先生の思いが込められているからこそ)、生徒は聞き流すことなく練習に取り組んでいたのだと思います。

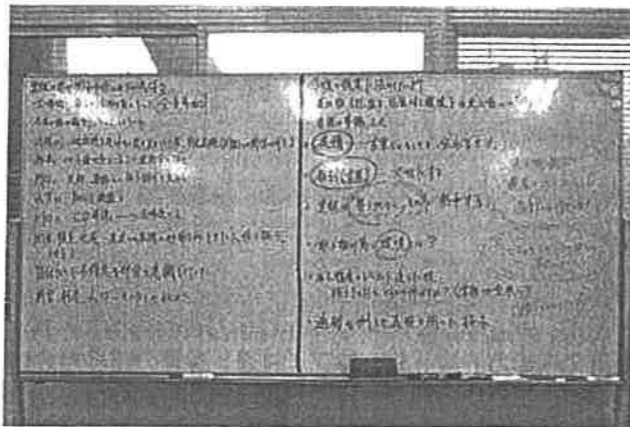
「場の設定」と「生徒の実態に即した教材教具の準備」。自分の国語の授業ではどのように展開できるのか…悩むというか、自分にできるのかという怖れなのか、何ともいえない不安が生じますが、今回までの実技教科3連発の研究授業の中で学んだことを消化して、更に授業研究と授業改善に繋げていきたいと考えます。

「授業研究会」では上記に加えて、「普段とは違う生き活きとした姿を見ることができた」「教師も生徒も笑顔が

多く見られる授業であった」といった感想が聞かれましたが、授業者の真鳥先生からは、

- ①生徒の現状の観察とそれに即した指導プランの変更を行う(授業中に)。
- ②「ことば」を大切にしたいという基本スタンスをもって指導している。
- ③「鑑賞したい」という思いを大切にしたい。

の3点についてお話をいただきました。特に「ことば」については、私たち教員の言葉は子ども達に大きな影響を与えるものですので、十分に注意しながら使っていきたいなと感じました。



なお、柳本指導主事からは指導助言の中で、「是非一緒に勤務したい学校」とのお話を最後にいただきました。大変嬉しいお言葉であると共に、更に気を引き締めていかなければならないと思う所です。

10月は非常に多忙な1ヶ月です。毎週研究授業が実施され、文化祭や70周年記念式典、さらには12月20日(火)には「第5回公開授業研究会」が行われ、それらの準備に文字通り「忙殺」されることだと思います。

そんな状況でも、【学びの共同体】で培ってきた「同僚性」によってお互いでカバーし合いながら乗り越えていければと思います。 **次回発行予定：10月19日(水)**



まなびあい



2016/10/19 (水) 第8号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也

「見取り」と「評価の即時性」

“解きたくなる(取り組みたくなる)”,
課題の設定方法と教材教具の在り方とは？

§

10月は「研究授業シーズン」。先生方に於かれましては日々の業務や70周年関係のお仕事もあられる中での研修、大変お疲れ様です。また、趣旨をご理解頂き誠にありがとうございます。現在のところ、大変スムーズに校内研修が進んでおります。

さて、10月6日(木)に前川先生による1年2組の「コミュニケーション英語Ⅰ」、10月13日(木)には川上先生による2年1組の「数学Ⅱ」の研究授業が行われ、また様々な「学び」を先生方と共有することができました。授業を提供下さいました両先生に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

前川先生の授業では、楽器を用いてあらゆる生徒にも親しみやすい工夫がされていました。先生方も「ポン・ポン」のリズムがしばらくは頭から離れない日々が続いたのではないのでしょうか。しかし表面的な取り組みではなく、英語科の先生のコメントや教育センターの前田由美子係長(英語)の指導助言の中で、その取り組みは音声学に根ざした非常に専門性が高い取り組みであるとのことでした。また、板書の内容が授業の中で困難に直面したときに「戻って考える」ことができるように配慮されていた点も大変勉強になりました。授業の最後には学級全体が円になって「グルグル」という形式で発音の確認をされていました。そこで教師が評価をして回る(それも複数回!)ことで生徒のモチベーションも上がり、非常に意欲的かつ力の付く英語の授業空間が醸成されていたと思います。

川上先生の授業では、川上先生の「生徒を『待てる』我慢強さ」と「全てを教えない『バランス』」が非常に際立ちました。また、「静かに」「伝えるべき情報を簡潔かつ的確に伝える」ことにより、生徒が落ち着いて「考え

てみよう」「やってみよう」と思わせることができていることに、川上先生の卓越した指導力を感じました。また、川上先生の授業の中では「様々な学びの形」を目にすることができました。「黙々と取り組む子」「隣の子の解答をチラ見する子」「分からないことを“分からない”とはっきり伝えている子」…など様々な学びがあったと思います。川上先生はそのような状況を的確に見取り、前述した「絶妙なバランスのヒント」を出し、評価をし、穏やかな表情で生徒を見守っていらっしゃいます。同い年の西村としては、もう「嫉妬」してしまうレベルの授業内容と指導力だったと思います…。

今回2つの授業から様々なことを学ばせていただきましたが、「見取り」と「評価の即時性」については今一度自分の授業と授業に向かう姿勢を再考せねばならないなと感じました。特に、「評価の即時性」。2つの研究授業ではある一定の評価を与えられることで生徒のやる気が出た場面を何度か見る事ができました。しかし効果的な評価をするには、万全な授業準備(教材研究)と綿密な「見取り」が求められます。【学びの共同体】の授業準備が、一斉授業と比べて大変だと言われる所以はこのような部分にあるのだろうと再認識しました。

また、お二人の授業を参観させていただき、教育センターや高校教育課の先生方のお話を聞く中で、「教科専門性」をたゆみ無く磨いていかなければならないのだなと危機感を覚えました。まだまだ「甘い」「浅い」とご指導されてばかりではありますが、「授業の命」である「発問(=共有・ジャンプ課題)」のレベルを保証するために、頑張っていかなければならないと感じた次第です。

最後になりましたが、教育センターの前田係長と小西指導主事、高校教育課の甲斐係長と島田指導主事及び白川指導主事からは、本校の取り組みについて非常に高い評価を頂いております。今後とも教職員一丸となって、【学びの共同体】を推進していきたいと思っております。今後とも宜しくお願いいたします。

次回発行予定：11月1日(火)



まなびあい



2016/11/17 (木) 第9号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也

「課題の在り方」を考える

“協同したくなる” “協同の必要性を感じさせる”
学習課題を以下に設定するか…

「西濤祭」と70周年記念式典・70周年記念祝賀会、大変お疲れ様でした！式典当日の生徒の「凛」とした姿も勿論素晴らしいのですが、当日に至るまでの様々な準備（企画運営、外部折衝、駐車場整理、環境整備などなど…）の中で、生徒も含めた「チーム西彼杵」の力が随所に発揮され、県内でも有数の力のある学校として、来校された地域の方々や教育関係者、各種メディアを通じて広く知れ渡ったのではないのでしょうか。この波、「西濤」に乗って、更に「生徒のための」「地域のための」学校を先生方や生徒たちと目指していきたいと思いを新たにしたいところです。

§

この「まなびあい」の発行が滞っていたことを心よりお詫び申し上げます。大変申し訳ありません。学校の根幹の一つである【学びの共同体】について先生方と学んでいく一つのツールとしての本稿の発行が滞ったことを重く受け止め、業務に邁進していく所存です。

§

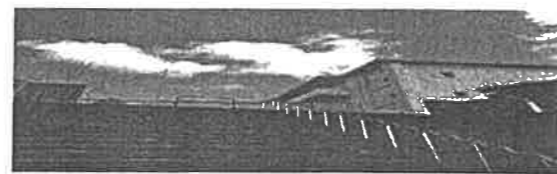
さて、表題にあります通り、「課題の在り方」を今後は追究していかなければならないと感じています。これまで我々は生徒の「見取り」について取り組み、そのレベルはかなりのものになっているのではないかと考えます（学校訪問や研修会参加を通して、西彼杵の先生方と他の学校の先生方の視点の差をよく感じます）。これからは更に一つレベルを上げて、「ジャンプ課題（共有の課題）に対する学びの状況」の見取りを通して、“課題の在り方”を先生方と協同して探究していく段階に移行してい

きたいと考えます。

§

では、課題の在り方考えるにあたってどのような視点があるのでしょうか。そのヒントになるのではないかと思います、別添資料として『「学びの共同体」の実践 学びが開く！高校の授業』（明治図書：佐藤学ほか編著）の中にある、麻布教育研究所の永島孝嗣先生（3学期の職員研修で来校されます）の記事を準備しましたので、ご一読いただければと思います。教職員一丸となって【学びの共同体】を深化させ、生徒の力を伸ばすべく頑張っていきたいと思います！

平戸高校を訪問してきました！



11月9日（水）、校長先生・畠山先生・西村の3名で平戸高校（林田誠一校長/生徒数114名）を訪問してきました。平戸高校は今年度の9月から本格的に【学びの共同体】を導入され、全校を上げて意欲的に研究と実践を積み重ねられておられます。

今回の訪問は、授業参観と研究協議への参加、及び本校での取り組みの説明と、福田校長先生による講話でしたが、質問をいただいた内容やICT機器（書画カメラ）を活用した授業研究会の在り方にこちらも多くの学びを得ることができました。特に、『「他者に説明する」ためには十分な理解が必須である」という、「支える側も支えることを通して学ぶことができる」といったことを、自分自身が体感する良い契機となりました。

次回発行予定：11月30日（水）



まなびあい



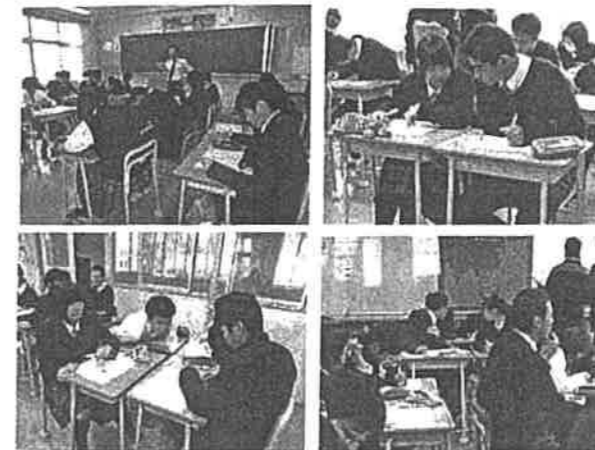
2016/12/1 (木) 第10号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也

ジャンプ課題をどうするか？

松尾先生の研究授業から見えてくる
ジャンプ課題の“本質”の片鱗

11月17日（木）7時間目、松尾先生による数学の研究授業及び授業研究会を実施いたしました。2学期末考査直前の慌ただしい中にもかかわらず、松尾先生に授業を提供していただき、また先生方におかれましては熱心に協議いただき、充実した研修になりました。誠にありがとうございました。



松尾先生の事前の綿密な教材研究とそれを基にした授業構成、そして何と言っても適確なタイミングと軽妙な言い回しによる声掛けや指示により、生徒が生き生きと仲間と協同して「学び」を深めていた姿が、非常に印象的な授業でした。

§

今回の授業研究から、視点を一部変更して先生方には協議いただきました。その目的については前号でお知らせいたしましたが、今後、本校における【学びの共同体】がその本質に近付き、生徒と教師が協同して伸ばしていく形になるためには、「課題をいかに設定するか」、特に「ジャンプ課題」をどのように設定するかについて本気で考えていかなければなりません。

今回の研究協議では、「ジャンプ課題」の在り方について、主に以下のような視点が確認されました。

- ①生徒が「何とかできそうだな」と思うような難易度
- ②既習内容を確認・応用しながら取り組むことができる内容（プロセスを重視する課題）。
- ③他者と協力したいと思わせる内容。

また、松尾先生の授業では敢えて最初に条件が不足した状態で課題を提示することで、全ての生徒に「気づき」を持たせ、それを切り口に平等性を担保しながら（IQや習熟度関係無く）協同学習を進めていく特徴もあったかと思えます。



今回の授業研究を通して、「ジャンプ課題への取り組みの中で、既習内容の確認や定着ができる」という、「プロセス」を大切にできる視点がジャンプ課題の設定における重要な要素の一つであることを学ぶことができました。松尾先生、協議に参加された先生方、ありがとうございました。

12月20日（火）の「第5回公開授業研究会」

昨日の運営委員会でのご審議を経て、担当の方で修正及び調整しているところです。今回も先生方には無理なお願いをしなければならない部分が多々出て参ります。調整力不足で大変申し訳ありませんが、ご協力のほど宜しくお願いいたします。

次回発行予定：12月14日（水）

まなびあい

2016/12/27 (火) 第11号

【学びの共同体】プロジェクトチーム 文責：西村卓也



第5回公開授業研究会

盛会の内に終了することができました！

…木下先生・臼山先生、本当にお疲れ様でした☆

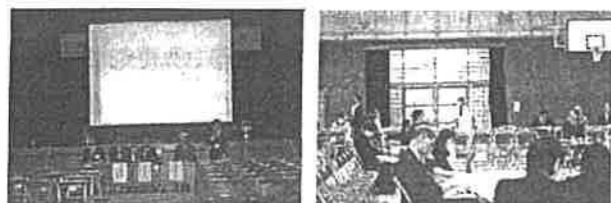
12月20日(火)、先生方のこの上ないご尽力と生徒の頑張りによって、無事に「第5回公開授業研究会」を成功裏の内に終了することができました！誠にありがとうございました。



特に校内のNIE主担当の木下先生、NIEと【学びの共同体】との連携ということでご苦労が絶えなかったと思います。また、中心授業を担当された臼山先生におかれましては、生徒の主体的な「学ぶ態度」を引き出す素晴らしい授業でした。勉強になりました。ありがとうございました！



そして管理職の先生方には、NIE協議会との打ち合わせや各種機関との連絡調整、出欠管理など見えないところで大変お世話になりました。重ねてお礼申し上げます。ありがとうございました。



姜尚中先生の講演は、大変分かりやすく情報“氾

濫”社会に生きる私たちが、「いかに生きるべきか」ということについて、「主体的に知る(=学ぶ)」という視点を通して考える機会を与えてくださいました。また、「無関心は病気である」というフレーズも、心に深く刻まれています。自身のこれまでの指導や職場での人間関係、立ち居振る舞いを考えさせられ、大変これまでの自分が恥ずかしく、大いに反省しなければならないと痛感したところです。生徒も、一生懸命にメモを取りながら講演を聞いていました。



2016年の終わりにあたり…「感謝」

2016年が間もなく幕を閉じようとしています。今年一年は、「進化」から「深化」へ…「西濤～西彼杵からの大いなる挑戦～」ということで、校内に於ける【学びの共同体】の更なる発展に向けて、多くの先生方と研修会や授業研究を通して、学びを深めることができました。誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

§

さて、今後は本格的に(これまでも一生懸命に皆さんと一緒に考えてきましたが)「ジャンプ課題の在り方」について、研究を深めていかなければならないと考えます。また、【学びの共同体】を中心に

据えた本校に於ける「評価」の在り方」についても考えなければならない時期になったと、危機感を抱いております。「西彼杵高校のジャンプ課題」と「西彼杵高校の評価の在り方」は、「西彼杵高校の職員」にしか作ることができません。そして、これは一部の職員だけでなく、「全ての職員」による積極的な協議・検討と、実際に動いてみる必要があると考えます。

§

これまで、本校は「チーム西彼杵」で70周年記念事業や公開授業研究会など、様々なことに全職員一丸となって取り組み、成果を上げることができました。その力を、今後はこれまで蓄積してきた【学びの共同体】に関する経験や知識、時には失敗したことなどを踏まえ、「西彼杵高校の【学びの共同体】」を実現するための「西彼杵高校の“ジャンプの課題”」、そして「西彼杵高校の“評価”の在り方」の実現に活かしていければと思います。

§

最近、様々な研修会に参加させて頂いていますが、その中で感じることは、「生徒に身に付けさせるべき力とは何か？」ということです。自分自身の反省になってしまい恐縮ですが、自分自身の中に、よく聞くフレーズである「生きる力」に関する理解が不足していることを痛感します。目まぐるしい社会変化の中で、生徒が「自らを律し、自分の足で立つ」ために、どのような力を身に付ければよいのか。学習指導要領の改訂や大学入試制度改革に伴い、様々な意見や議論が教育界に出てきていますが、表面的な論議に翻弄されることなく、教育について勉強し続けなければならないと考えています。まずは、この冬季休業中は、【学びの共同体】と学習指導要領について、もう一度見直してみたいと思います。

§

4月からプロジェクトチームのリーダーを拝命しましたが、自身の勉強不足とマネジメント能力の不足により、多くの先生方にご迷惑をお掛けし、助けて頂きながら2016年を終えることができました。本当にありがとうございました。2017年、課題は山積みですが、西彼杵高校の生徒のために、先生方と「協働」しながら一つ一つ取り組んでいきたいと考えます。今年一年大変お世話になりました。

どうぞ、よいお年をお迎えください。

プロジェクトリーダー 西村卓也

連絡 3学期の主な予定

- ◆1月23日(火) 職員研修(永島先生)
 - 木下先生研究授業。研究協議。講演。
 - ※年度内の校内研究授業はこれで最後です。
- ◆研究紀要『西濤(仮題)』の作成
 - プロジェクトチームの先生方を中心に、これまでの【学びの共同体】を中心とした本校のこれまでの歩みと今後の展望を、一冊の紀要にまとめたいと考えます。詳細は年明けにお伝えいたします。宜しくお願いたします。下記の章立てと担当は、現段階での構想です。参考としてご参照ください。

【学びの共同体】紀要『西濤(仮題)』章立て

◆表紙(目次) 西村

□巻頭言(「授業改革」から「学校改革」へ) 校長

□1. 【学びの共同体】について(理念・授業・授業研究) 西村

□2. 年間研究授業計画 西村

□3. 校内授業研究(授業デザイン+事後)ホ→「成果・課題・今後の展望」※別冊式)

一各担当で確認後、共有フォルダの中へデータを提出する。

- ①5/12(木)林田 ②6/9(木)島山 ③7/7(木)田中
- ④8/26(金)田川 ⑤9/15(木)的野 ⑥9/20(火)真島
- ⑦10/6(木)前川 ⑧10/13(木)川上 ⑨10/20(木)木田
- ⑩10/27(木)本多 ⑪1/24(火)木下

□4. 「まなびあい」 西村

□5. 第4回公開授業研究会資料 西村

□6. 第5回公開授業研究会資料 西村

□7. 生徒について

- ①授業アンケート結果 西村
- ②アセス結果 山
- ③遅刻欠席者数推移 川上
- ④保健室利用者数推移 末松
- ⑤成績推移(進学コース) 臼山

□8. 【学びの共同体】に取り組んで 本多

- ①生徒(1~3年生各1人) ②職員(各教科1名)

◆裏表紙(編集後記) 西村

◆表紙(『西濤の詩』) 西村